

日蓮大聖人御書全集

せんじしやう

撰時抄

新版
160
〜
211

撰時抄

けんじがんねん

建治元年(75)

さい

54歳

にしやまゆ いどの

西山由比殿

しやくしにちれんの

釈子日蓮述ぶ。

そ

ぶつぽう

がく

ほう

かなら

とき

習

かこ

夫れ、仏法を学せん法は、必ずまず時をならうべし。過去

だいつうちしようぶつ

しゅつせ

たま

じゅうしようこう

あいだいつきよう

と

たま

の大通智勝仏は出世し給いて十小劫が間一経も説き給

きよう

い

ひと

ざ

じゅうしようこう

い

わず。経に云わく「一たび坐して十小劫」。また云わく

ほとけ

とき

いた

し

しょう

う

もくねん

「仏は時いまだ至らずと知ろしめして、請を受けて默然

ざ

とううんぬん

いま

きようしゅしやくそん

しじゅうよねん

として坐したまえり」等云々。今の教主釈尊は四十余年の

ほけきよう

と

たま

きよう

い

とくとき

いた

ほど法華経を説き給わず。経に云わく「説時のいまだ至ら

ゆえ

うんぬん

ろうし

はは

たい

そ

はちじゅうねん

みろく

ざるが故なり」と云々。老子は母の胎に処して八十年、弥勒

ぼさつ

とそつ

ないいん

こ

たま

ごじゅうろくおくしちせんまんさい

菩薩は兜率の内院に籠もらせ給いて五十六億七千万歳をま

たま

か

ほとどきす

はる

にわとり

あかつき

ち給うべし。彼の時鳥は春をおくり、鶏鳥は暁をまつ。

ちくしよう

ぶつぼう

畜生すら、なおかくのごとし。いかにいわんや、仏法を

しゆぎよう

とき

ただ

修行せんに時を糾さざるべしや。

じやくめつどうじよう

みぎり

じつぼう

しよぶつじげん

いっさい

だいぼさつ

寂滅道場の砌には、十方の諸仏示現し、一切の大菩薩

しゆうえ

たま

ぼんたい

してん

ころも

りゆうじんはちぶ

集会し給い、梵帝・四天は衣をひるがえし、竜神八部は

たなごころ

あ

ぼんぷだいこんじよう

もの

みみ

しやうしん

掌を合わせ、凡夫大根性の者は耳をそばだて、生身

とくにん

もろもろ

ぼさつ

げだつがつとうじよう

たま

せそん

得忍の諸の菩薩・解脱月等請をなし給いしかども、世尊

にじようさぶつ

くおんじつじよう

みようじ

秘

そくしんじようぶつ

いちねん

は二乗作仏・久遠実成をば名字をかくし、即身成仏・一念

さんぜん

かんじん

ぎのたま

三千の肝心、その義を宣べ給わず。これらはひとえにこれ、

きあ

とききた

たま

きよう

機は有りしかども時の来らざれば、のべさせ給わず。経に

いとくとき

いた

ゆえ

とううんぬん

云わく「説時のいまだ至らざるが故なり」等云々。

りようぜんえじよう

みぎり

えんぶだいいち

ふこう

ひと

あじやせ

靈山会上の砌には、閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世

だいおうぎ

いちだいほうぼう

だいばだった

てんのうによらい

な

大王座につらなり、一代謗法の提婆達多には天王如来と名

ごしよう

りゆうによ

じやしん

ほとけ

をさずけ、五障の竜女は蛇身をあらためずして仏になる。

けつじようしよう

じようぶつ

い

しゆはな

このみ

くおんじつじよう

決定性の成仏は焦れる種の花さき果なり、久遠実成は、

ひやくさい

おきな

にじゆうご

こ

いちねんさんぜん

百歳の叟、二十五の子となれるかとうたがう。一念三千は

くかいそくぶつかい ぶつかいそくくかい だん

きよう いちじ

九界即仏界・仏界即九界と談ず。されば、この経の一字は

によいほうじゆ いくく しよぶつ しゆし

如意宝珠なり。一句は諸仏の種子となる。これらは、機

じゆく ふじゆく とき いた きよう い

熟・不熟はさておきぬ、時の至れるゆえなり。経に云わ

いままさ とき けつじよう だいじよう と

く「今正しくこれその時なり。決定して大乘を説く」等

うんぬん

云々。

と い き だいほう さず ぐにん

問うて云わく、機にあらざるに大法を授けられれば、愚人は

さだ ひぼう あくどう お と もの つみ

定めて誹謗をなして悪道に墮つるならば、あに説く者の罪

にあらずや。

こた い ひとみち みち まよ もの つく もの

答えて云わく、人路をつくる。路に迷う者あり。作る者の

つみ

罪となるべしや。

ろういくすり

びょうにん

良医薬を病人にあたう。

びょうにんきら

病人嫌つて服

ふく

せずして死せば、

し

良医の失となるか。

ろうい

とが

たず

い

ほけきよう

だいに

い

むち

ひと

なか

尋ねて云わく、

法華經の第二に云わく「

無智の人の中に

きよう

と

おな

だいし

い

して、この經を説くことなかれ」。

同じき第四に云わく

ぶんぷ

ひと

じゅよ

おな

だいご

い

「分布してみだりに人に授与すべからず」。同じき第五に云

ほけきよう

しよぶつによらい

ひみつ

ぞう

しよきよう

わく「この法華經は、諸仏如来の秘密の蔵にして、諸經の

なか

もつと

かみ

あ

じようや

しゆこ

中において最もその上に在り。長夜に守護して、みだりに

せんぜつ

とううんぬん

きようもん

き

と

宣説せず」等云々。これらの經文は、機にあらずば説かざ

れというか、いかん。

いま はんきつ

い

ふきようほん

い

ことば

今、反詰して云わく、不軽品に云わく「しかもこの言を

な

われ

ふか

なんだち

うやま

とううんぬん

ししゆ

なか

作さく『我は深く汝等を敬う』と」等云々。「四衆の中に、

しんに

しよう

こころふじよう

ものあ

あつく

めり

い

瞋恚を生じて心不浄なる者有つて、悪口・罵詈して言わ

むち

びく

い

しゆにん

く『この無智の比丘』と」。また云わく「衆人はあるいは

じようもく

がしやく

ちようちやく

とううんぬん

かんじほん

杖木・瓦石をもつて、これを打擲す」等云々。勸持品に

い

もろもろ

むち

ひと

あつく

めりとう

とうじよう

云わく「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀杖

くわ

ものあ

うんぬん

きようもん

あつく

めりないし

を加うる者有らん」云々。これらの経文は、悪口・罵詈乃至

ちようちやく

説

そうろう

と

ひと

とが

打擲すれどもととかれて候は、説く人の失となりける

か。

もと い りようせつ すいか こころ 得
求めて云わく、この両説は水火なり。いかんが心うべ

き。

こた い てんだい い とき かな しようあんい
答えて云わく、天台云わく「時に適うのみ」。章安云わ

しゆしやよろ え いつころ とうらんぬん しゃく
く「取捨宜しきを得て、一向にすべからず」等云々。釈の

こころ とき ぼう 説 とき
心は、ある時は謗じぬべきにはしばらくとかず、ある時は

ぼう し と とき いつき しん
謗ずとも強いて説くべし、ある時は一機は信ずべくとも

まんきぼう 説 とき まんきいちどう ぼう
万機謗ずべくばとくべからず、ある時は万機一同に謗ずと

し と
も強いて説くべし。

しよじようどう とき ほう え くだくりん こんごうどう こんごうぞう もんじゆ
初成道の時は、法慧・功德林・金剛幢・金剛蔵・文殊・

ふげん みろく げだつがつとう だいぼさつ たいしやく してんとう ぼんぷだいこんじよう
普賢・弥勒・解脱月等の大菩薩、梵帝・四天等の凡夫大根性

もの 数 知 ろくやおん その くりんとう ごにん かしようとう

の者かずをしらず。鹿野苑の苑には、俱隣等の五人、迦葉等

にひやくごじゆうにん しやりほつとう にひやくごじゆうにん はちまん してん ほうどう

の二百五十人、舍利弗等の二百五十人、八万の諸天。方等

だいえ ぎしき せそん じぶ じようぼんだいおう 懇 こ

大会の儀式には、世尊の慈父の浄飯大王ねんごろに恋いせ

たま ほとけ みや い たま かんぶつざんまいきよう 説

させ給いしかば、仏、宮に入らせ給いて観仏三昧経をとか

たま ひも おん とうりてん くじゆうにち あいだこ たま

せ給い、悲母の御ために忉利天に九十日が間籠もらせ給い

まやきよう たも じぶ ひも

しには、摩耶経をとかせ給う。慈父・悲母なんどには、い

ひほう お たも ほけきよう と

かなる秘法か惜しませ給うべきなれども、法華経をば説か

たま 詮 き とき 至

せ給わず。せんずるところ、機にはよらず、時いたらざれ

ば、いかにもとかせ給わぬにや。

説

たま

問うて云わく、いかなる時にか小乗・権經をとき、い

かなる時にか法華經を説くべきや。

答えて云わく、十信の菩薩より等覺の大士にいたるまで、

時と機とをば相知りがたきことなり。いかにいわんや、我ら

は凡夫なり。いかでか時機をしるべき。

求めて云わく、すこしも知ることあるべからざるか。

答えて云わく、仏眼をかつて時機をかんがえよ。仏日を

もつて国をてらせ。

と い ハハ

問うて云わく、その心いかん。

こた い だいじつきよう だいかくせそん がつぞうぼさつ たい

答えて云わく、大集経に、大覺世尊、月藏菩薩に対して

みらい とき さだ たま われめつど のち ごひやくさい

未来の時を定め給えり。いわゆる、我滅度して後の五百歳の

うち げだつけんご つぎ ごひやくねん ぜんじようけんご いじよう いっせんねん

中には解脱堅固、次の五百年には禅定堅固（已上、一千年）、

つぎ ごひやくねん どくじゆたもんけんご つぎ ごひやくねん たぞうとうじ

次の五百年には読誦多聞堅固、次の五百年には多造塔寺

けんご いじよう にせんねん つぎ ごひやくねん わ ほう なか

堅固（已上、二千年）、次の五百年には「我が法の中におい

とうじようこんしよう びやくほうおんもつ とううんぬん

て鬪諍言訟して白法隱没せん」等云々。

ご ごひやくさい にせんごひやくよねん ひとびと りようけん

この五の五百歳、二千五百余年に人々の料簡さまざまな

かんど どうしやくぜんじ い しやうぞうにせん しか ごひやくさい

り。漢土の道綽禅師が云わく「正像二千、四箇の五百歳に

しょうじよう

だいじよう

びやくほうさか

まつぼう

い

は、小乗と大乘との白法盛んなるべし。末法に入つて

かれ

びやくほうみなしやうめつ

じやうど

ほうもん

ねんぶつ

びやくほう

は、彼らの白法皆消滅して、浄土の法門、念仏の白法を

しゆぎよう

ひと

しょうじ

離

にほんこく

ほうねん

修行せん人ばかり生死をはなるべし。日本国の法然が

りようけん

い

いまにほんこく

るふ

ほけきよう

けごんぎよう

料簡して云わく「今日本くに流布する法華経・華嚴経なら

だいにちきよう

もろもろ

しょうじようきよう

てんだい

しんごん

りつとう

しよしゆう

びに大日経、諸の小乗経、天台・真言・律等の諸宗

だいじつきよう

きもん

しょうぞうにせんねん

びやくほう

まつぼう

い

は、大集経の記文の正像二千年の白法なり。末法に入つ

かれ

びやくほう

みなめつじん

ぎよう

ひと

ては彼らの白法は皆滅尽すべし。たとい行ずる人ありと

いちにん

しょうじ

離

じゆうじゆうびばしやろん

どんらんほつし

も、一人も生死をはなるべからず。十住毘婆沙論と曇鸞法師

なんぎようどう

どうしやく

いちにん

う

ものあ

ぜんどう

の『難行道』、道綽の『いまだ一人も得る者有らず』、善導

の『千の中に一りも無し』、これなり。彼らの白法隠没の次

じょうどさんぶきよう

みだしようみよう

いちぎよう

だいびやくほう

には、浄土三部經、弥陀称名の一行ばかり大白法とし

しゅつげん

ぎよう

ひとびと

あくにん

ぐにん

て出現すべし。これを行ぜん人々は、いかなる悪人・愚人

じゅう

すなわ

じゅうしよう

ひやく

すなわ

ひやくしよう

なりとも、『十は即ち十生じ、百は即ち百生ず』『た

じょうど

いちもん

あ

つうにゆう

みち

だ浄土の一門のみ有つて通入すべき路なり』とは、これな

ごせ

ねが

ひとびと

えいざん

とうじ

おんじよう

しち

り。されば、後世を願わん人々は、叡山・東寺・園城・七

だいじとう

にほんいつしゆう

しよじしよさん

ごきえ

止

か

大寺等の日本一州の諸寺諸山の御帰依をとどめて、彼の

じさん

寄

置

でんぱた

ぐんごう

奪

取

ねんぶつどう

付

寺山によせおける田畠・郡郷をうばいとして念仏堂につけ

けつじよう

おうじよう

なむあみだぶつ

勸

ば、決定して往生せん。南無阿弥陀仏」とすすめければ、

わ ちよういちどう

ぎ

いま ごじゅうよねん

にちれん

我が朝一同にその義になりて今に五十余年なり。日蓮これ

あくぎ なん

破

こと古 そうち

らの悪義を難じやぶることは、事ふり候いぬ。

か だいじつきよう

びやくほうおんもつ

とき

だいご

ごひやくさい

とうせい

彼の大集経の白法隠没の時は、第五の五百歳、当世な

うたが

か

びやくほうおんもつ

つぎ

ることは疑いなし。ただし、彼の白法隠没の次には、

ほけきよう

かんじん

なんみようほうれんげきよう

だいびやくほう

いちえんぶだい

法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の、一閻浮提の

うちはちまん

くに

くにぐに

はちまん

おう

おうおう

しんか

内八万の国あり、その国々に八万の王あり、王々ごとに臣下

ばんみん

いまにほんこく

み だしようみよう

ししゆ

くちぐち

ならびに万民までも、今日本国に弥陀称名を四衆の口々

とな

こうせんる ふ

たも

に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

と い

しょうもん

問うて云わく、その証文いかん。

こた い ほけきよう だいしち い われめつど のち のち

答えて云わく、法華經の第七に云わく「我滅度して後、後

ごひやくさい うち えんぶだい こうせんる ふ だんぜつ

の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむること

とううんぬん きようもん だいじつきよう びやくほうおんもつ つぎ とき

なかれ」等云々。經文は、大集經の白法隱没の次の時を

説 たも こうせんる ふ うんぬん どうだいろうく まき い あく

とかせ給うに、「広宣流布」と云々。同第六の卷に云わく「惡

せまつぼう とき よ きよう たも とううんぬん だいご まき

世末法の時、能くこの經を持たば」等云々。また第五の卷

い のち まつせ ほうめつ ほつ とき とく

に云わく「後の末世の法滅せんと欲せん時において」等。

だいし まき い きよう によらい げん いま

また第四の卷に云わく「しかもこの經は、如来の現に在す

おんしつおお めつど のち だいご

すらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」。また第五の

まき い いっさいせけん あだおお しん がた だいしち

卷に云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」。また第七の

まき だいご こひやくさい とうじようけん とき と い あくま

巻に、第五の五百歳・鬪諍堅固の時を説いて云わく「悪魔・

まみん しよてん りゆう やしや くはんだとう たよ え だいじつきよう

魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等、その便りを得ん」。大集経

い わ ほう なか とうじようこんしょう とううんぬん

に云わく「我が法の中において鬪諍言訟せん」等云々。

ほけきよう だいご い あくせ なか びく い

法華経の第五に云わく「悪世の中の比丘」。また云わく「あ

あれんにや あ とううんぬん い あつき み

るいは阿練若に有り」等云々。また云わく「悪鬼はその身に

い とううんぬん

入る」等云々。

もん ころ だいご こひやくさい とき あつき み い だいそうとう

文の心は、第五の五百歳の時、悪鬼の身に入る大僧等、

こくちゆう じゆうまん とき ちじんひとりしゆつげん か あつき

国中に充満せん。その時に智人一人出現せん。彼の悪鬼

い だいそうとう とき おうしん ばんみんとく かた あつく めり

の入る大僧等、時の王臣・万民等を語らつて悪口・罵詈、

じようぼく かりやく るざい しざい おこな とき しやか たほう じつぼう

杖木・瓦礫、流罪・死罪に行わん時、釈迦・多宝・十方の

しよぶつ じゆ だいぼさつ おお 付 だいぼさつ ほんたい にちがつ

諸仏、地涌の大菩薩らに仰せつけば、大菩薩は梵帝・日月・

してんとう もう 下 とき てんぺんちようさか

四天等に申しくだされ、その時、天変地天盛んなるべし。

こくしゆとう 諫 もち りんごく かれがれ

国主等そのいさめを用いずば、隣国におおせつけて彼々の

くにぐに あくおう あくび くとう 責 ぜんだい みもん

国々の悪王・悪比丘等をせめらるるならば、前代未聞の

だいとうじよう いちえんぶだい お とき にちがつ て

大闘諍、一閻浮提に起こるべし。その時、日月の照らすと

してんげ いっさいしゆじよう くに 惜

ころの四天下の一切衆生、あるいは国をおしみ、あるいは

み いっさい ぶつぼさつ 祈 掛

身をおしむゆえに、一切の仏菩薩にいのりをかくとも

験 憎 ひと しょうそう しん むりよう

しるしなくば、彼のにくみつる一りの小僧を信じて、無量

だいそうとう はちまん だいおうとう いっさい ばんみん みな こうべ ち 付
の大僧等・八万の大王等・一切の万民、皆、頭を地につけ
たなごころ あ いちどう なんみようほうれんげきよう 唱

掌 を合わせて、一同に南無妙法蓮華經となうべし。例

じんりきほん じゅうじんりき とき じっぼうせかい いっさいしゅじよう いちにん

せば、神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生、一人も

しゃばせかい む だいおんじよう 放

なく娑婆世界に向かつて大音声をはなちて、「南無

しやかむにぶつ なむしやかむにぶつ なんみようほうれんげきよう

釈迦牟尼仏・南無釈迦牟尼仏、南無妙法蓮華經・

なんみようほうれんげきよう いちどう 叫

南無妙法蓮華經」と一同にさけびしがごとし。

と い きようもん ふんみよう そうろう てんだい みようらく でんぎよう

問うて云わく、經文は分明に候。天台・妙楽・伝教

とう みらいき ことば

等の未来記の言はありや。

こた い なんじ ふしんさか しやく ひ

答えて云わく、汝が不審逆さまなり。釈を引かん時こ

きようろん

ふしん

きようもん

ふんみよう

そ経論はいかにとは不審せられたれ。経文に分明ならば

しゃく たず

しゃく もんきよう そうい

きよう 捨

釈を尋ぬべからず。さて、釈の文経に相違せば、経をす

しゃく 付

てて釈につくべきか、いかん。

かれない

どうりしごく

ぼんぷ なら

きよう

彼云わく、道理至極せり。しかれども、凡夫の習い、経

とお しゃく

ちか

ちか

しゃくふんみよう

少

しんじん

は遠し釈は近し。近き釈分明ならば、いますこし信心を

増

ますべし。

いまい

なんじ

ふしん

懇

しょうしょうしゃく

出

今云わく、汝が不審ねんごろなれば、少々釈をいだ

てんだいだいいい

のち

ごひやくさい

とお

みようどう

うるお

すべし。天台大師云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わ

みようらくだいいい

まつぼう

はじ

みようりな

ん」。妙楽大師云わく「末法の初め、冥利無きにあらず」。

でんぎようだいしい

しようぞう

す お

まつぼう

ちか

伝教大師云わく「正像やや過ぎ已わつて、末法はなはだ近

あ

ほつけいちじよう

き

いままき

とき

なに

きに有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり。何を

し

う

あんらくぎようほん

い

まつせ

ほうめつ

もつてか知ることを得る。安樂行品に云わく『末世の法滅

とき

い

よ

かた

すなわ

ぞう

お

せん時』となり。また云わく「代を語れば則ち像の終わ

まつ

はじ

じ

たず

とう

ひがし

かつ

にし

ひと

たず

り末の初め、地を尋ぬれば唐の東・羯の西、人を原ぬれば

すなわ

ごじよく

しよう

とうじよう

とき

きよう

い

おんしつおお

則ち五濁の生・鬭諍の時なり。経に云わく『なお怨嫉多

めつど

のち

ことば

まこと

ゆえあ

し。いわんや滅度して後をや』。この言、良に以有るなり」

うんぬん

云々。

そ

しやくそん

しゆつせ

じゆうこうだいく

げん

にんじゆひやくさい

とき

夫れ、釈尊の出世は住劫第九の滅、人寿百歳の時なり。

ひやくさい じっさい ちゅうげん ざいせごじゅうねん めつごにせんねん いちまんねん

百歳と十歳との中間、在世五十年、滅後二千年と一万年と

ちゅうげん ほけきょう るふ ときにど

なり。その中間に、法華經の流布の時二度あるべし。いわ

ざいせ はちねん めつご まつぼう はじ ごひやくねん

ゆる、在世の八年、滅後には末法の始めの五百年なり。し

てんだい みようらく でんぎようとう 進 ざいせほけきょう

かるに、天台・妙楽・伝教等は、すすんでは在世法華經の

とき 漏 たま しりぞ めつごまつぼう とき う

時にももれさせ給いぬ。退いては滅後末法の時にも生まれ

たま ちゅうげん 歎 たま まつぼう はじ

させ給わず。中間なることをなげかせ給いて、末法の始め

恋 たも おんふで れい あしだせんにな しったたいし

をこいさせ給う御筆なり。例せば、阿私陀仙人が悉達太子の

う たま み かな い げんしよう くじゅう

生まれさせ給いしを見て、悲しんで云わく「現生には九十

余 たいし じようどう み ごしよう むしきかい

にあまれり。太子の成道を見るべからず。後生には無色界

う ごじゆうねん せつぼう ざ 列
に生まれて五十年の説法の坐にもつらなるべからず。正像 しょうぞう

まつ う
末にも生まるべからず」となげきしがごとし。 歎

どうしん

ひとびと

み聞

よろこ

たま

しょうぞう

道心あらん人々は、これを見ききて悦ばせ給え。正像

にせんねん

だいおう

ごせ

思

ひとびと

まつぼう

いま たみ

二千年の大王よりも、後世をおもわん人々は末法の今の民

にてこそあるべけれ。これを信ぜざらんや。彼の天台座主よ しん か てんだいざす

なんみようほうれんげきよう

とな

らいにん

りよう

ぶ

りも、南無妙法蓮華經と唱うる癩人とはなるべし。梁の武

てい がん

い

だいばだつた

むけんじごく

しず

帝の願に云わく「むしろ提婆達多となつて無間地獄には沈

う ずらんほつ

うんぬん

むとも、鬱頭羅弗とはならじ」と云々。

と

い

りゆうじゆ

てんじんとう

ろんじ

なか

ぎ

問うて云わく、竜樹・天親等の論師の中にこの義ありや。

こた い りゆうじゆ てんじんとう ないしん ぞん たも
答えて云わく、竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給うと

ことば
はいえども、言にはこの義を宣べ給わず。

もと い ゆえ の たま
求めて云わく、いかなる故にか宣べ給わざるや。

こた い おお ゆえ いち か とき き
答えて云わく、多くの故あり。一には彼の時には機なし。

に とき さん しゃつけ ふぞく たま
二には時なし。三には迹化なれば付嘱せられ給わず。

もと い ねが 聞
求めて云わく、願わくは、このこと、よくよくきかんと

思
おもふ。

こた い そ ほとけ めつごにがつじゅうろくにち しやうほう
答えて云わく、夫れ、仏の滅後二月十六日より正法

はじ かしやうそんじや ほとけ ふぞく 受 にじゅうねん つぎ あ
の始めなり。迦葉尊者、仏の付嘱をうけて二十年。次に阿

なんそんじやにじゆうねん つぎ しょうなわしゆにじゆうねん つぎ うばくつたにじゆうねん

難尊者二十年。次に商那和修二十年。次に優婆崛多二十年。

つき だいたかにじゆうねん いじよういつびやくねん あいだ しょうじようきよう

次に提多迦二十年。已上一百年が間は、ただ小乗経の

ほうもん ぐつう しょうだいじようきよう みようじ

法門をのみ弘通して、諸大乘経は名字もなし。いかにい

ほけきよう 弘 つぎ みしゃか ぶつだなんだい

わんや、法華経をひろむべしや。次には弥遮迦・仏陀難提・

ぶつだみつた きようびく ふなしやとう し ごにん さき ごひやくよねん あいだ

仏駄蜜多・脇比丘・富那奢等の四・五人。前の五百余年が間

だいじようきよう ほうもんしょうしろうしゆつたい ぐつう

は大乘経の法門少々出来せしかども、とりたてて弘通

たま しょうじようきよう おもて 止 いじよう だいじつきよう

し給わず。ただ小乗経を面としてやみぬ。已上、大集経

さき ごひやくねん げだつけんご とき

の先の五百年、解脱堅固の時なり。

しょうほう のち ろつびやくねん い ごいつせんねん まえ ちゅうげん めみよう

正法の後の六百年已後一千年が前、その中間に馬鳴

ぼさつ びらそんじゃ りゆうじゅぼさつ だいばぼさつ らごそんじゃ そうぎやなんだい

菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅睺尊者・僧伽難提・

そうぎややしや くまらだ じゃやな ばんだ まぬら かんろくやな しし

僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子

とう じゅうよにん ひとびと はじ げどう いえ い つぎ

等の十余人の人々、始めには外道の家に入り、次には

しょうじようきよう 極 のち しょうだいじようきよう

小乗経をきわめ、後には諸大乘経をもつて

しよしょうじようきよう 散々 は うしな たま だいじ

諸小乗経をさんざんに破し失い給いき。これらの大士

とう しょうだいじようきよう しょうしょうじようきよう は たま

等は、諸大乘経をもつて諸小乗経をば破せさせ給いし

しょうだいじようきよう ほけきよう しょうれつ ふんみよう 書 たま

かども、諸大乘経と法華経の勝劣をば分明にかかせ給

しょうれつ 書 たま

わず。たとい勝劣をすこしかかせ給いたるようなれども、

ほんじやく じゅうみよう にじようさぶつ くおんじつじよう いこんとう みよう

本迹の十妙、二乗作仏、久遠実成、已今当の妙、

ひやつかいせんによ　いちねんさんぜん　かんよう　ほうもん　ふんみよう

百界千如・一念三千の肝要の法門は分明ならず。ただ、

ゆび

つき　指

もん　当

あるいは指をもつて月をさすがごとくし、あるいは文にあ

一　端

書

たま

けどう

しじゅう

してい

たりてひとはしばかりかかせ給いて、化導の始終・師弟の

おんごん

とくどう

う　む

いちぶん

しょうほう

遠近・得道の有無はすべて一分もみえず。これらは正法の

のち　ごひやくねん　だいじつきよう　ぜんじようけんご　とき

後の五百年、大集経の禪定堅固の時にあたれり。

しょうほういつせんねん

のち

がつし

ぶつぼうじゅうまん

正法一千年の後は、月氏に仏法充滿せしかども、ある

しょう

だい　は

ごんきよう

じつきよう

いは小をもつて大を破し、あるいは権経をもつて実経を

おんもつ

ぶつぼう

みだ

とくどう

ひと

漸

少

隠没し、仏法さまざまに乱れしかば、得道の人ようやくすく

ぶつぼう

あくどう

お

もの

数

知

なく、仏法につけて悪道に墮つる者かずをしらず。

しょうほういつせんねん

のち

ぞうほう

い

いちじゅうごねん

もう

正法一千年の後、像法に入つて一十五年と申せしに、

ぶつぼうひがし

なが

かんど

い

ぞうほう

さき

ごひやくねん

うち

仏法東に流れて漢土に入りనికి。像法の前の五百年の内、

はじ

いつびやくよねん

あいだ

かんど

どうし

がっし

ぶつぼう

じようろん

始めの一百余年が間は漢土の道士と月氏の仏法と諍論し

こと 定

さだ

ぶつぼう

て、いまだ事さだまらず。たとい定まりたりしかども、仏法

しん

ひと

こころ

深

ぶつぼう

なか

を信ずる人の心いまだふかからず。しかるに、仏法の中に

だいしよう

ごんじつ

けんみつ

分

しょうぎよういちどう

ゆえ

大小・権実・顕密をわかつならば、聖教一同ならざる故、

うたが

起

げてん

伴

もの

疑いおこりて、かえりて外典ともなう者もありぬべし。

恐

故

まとう

じくらん

みずか

し

これらのおそれあるかのゆえに、摩騰・竺蘭は、自らは知

だいしよう

わ

ごんじつ

言

止

つてしかも大小を分けず権実をいわずしてやみぬ。

その後、魏・晋・宋・齊・梁の五代が間、仏法の内に

のち ぎ しん そう せい りよう ごだい あいだ ぶつぽう うち
だいたいしよう ごんじつ けんみつ 争 どうり

大小・権実・顕密をあらそいしほどに、いずれこそ道理と

聞

かみいちにん

しもばんみん

ふしん

もきこえずして、上一人より下万民にいたるまで不審すく

なんさんほくしち

もう

ぶつぽうじゅうりゅう

分

なからず。南三北七と申して仏法十流にわかれぬ。いわ

みなみ

さんじ

しじ

ごじ

きた

ごじ

はんまん

ししゅう

ゆる、南には三時・四時・五時、北には五時・半満・四宗・

ごしゅう

ろくしゅう

にしゅう

だいじよう

いっとんとう

おのおのぎ

た

へんしゅう

五宗・六宗・二宗の大乗・一音等、各々義を立てて、辺執

すいか

たいこう

いちどう

いちだい

水火なり。しかれども、大綱は一同なり。いわゆる「二代

しようぎよう

なか

けごんぎようだいいち

ねはんぎようだいに

ほけきようだいさん

聖教の中には華嚴経第一、涅槃経第二、法華経第三なり。

ほけきよう

あごん

はんにや

じようみよう

しやくとう

きようぎよう

たい

法華経は、阿含・般若・浄名・思益等の経々に対すれ

しんじつ

りようぎきよう

しょうけん

ねはんぎよう

ば真実なり、了義経、正見なり。しかりといえども、涅槃経

たい

むじようきよう

ふりようぎきよう

じゃけん

きよう

とううんぬん

に対すれば無常教、不了義経、邪見の経」等云々。

かん

しひやくよねん

すえ

ごひやくねん

い

ちん

ずいにだい

ちぎ

漢より四百余年の末、五百年に入つて、陳・隋二代に智顗

もう

しょうそういちにん

のち

てんだいちしゃだいし

ごう

と申す小僧一人あり。後には天台智者大師と号したてまつ

なんぼく

じやぎ

破

いちだいししようぎよう

なか

ほけきよう

る。南北の邪義をやぶりて、「二代聖教の中には法華経

だいいち

ねはんぎようだいに

けこんぎよう

だいさん

とううんぬん

ぞうほう

第一、涅槃経第二、華嚴経は第三なり」等云々。これ像法の

さき

ごひやくさい

だいいじつきよう

どくじゆたもんけんご

とき

相当

前の五百歳、大集経の読誦多聞堅固の時にあいあたれり。

ぞうほう

のち

ごひやくさい

とう

はじ

たいそうこうてい

ぎよう

げんじよう

像法の後の五百歳は、唐の始め太宗皇帝の御宇に、玄奘

さんぞう

がっし

い

じゅうくねん

あいだ

ひやくさんじつかこく

じとう

けんもん

三蔵、月支に入つて十九年が間、百三十箇国の寺塔を見聞

おお ろんじ あ

はちまんしようぎよう じゅうにぶきよう

して多くの論師に値いたてまつりて、八万聖教・十二部經

えんदै なら 極

なか にしゅう

の淵底を習いきわめしに、その中に二宗あり。いわゆる

ほつそうしゅう さんろんしゅう

にしゅう なか ほつそうだいじよう とお

法相宗・三論宗なり。この二宗の中に法相大乘は、遠く

みろく むじやく ちか

かいげんろんじ つた

かんど 帰

たい

は弥勒・無著、近くは戒賢論師に伝えて、漢土にかえりて太

そうこうてい 授

たも

しゅう こころ

ぶつきよう

き

したが

宗皇帝にさづけさせ給う。この宗の心は「仏教は機に随

いちじよう き

さんじようほうべん

いちじようしんじつ

うべし。一乗の機のためには三乗方便・一乗真実なり。

ほけきようとう

さんじよう

き

さんじようしんじつ

いわゆる法華經等なり。三乗の機のためには三乗真実・

いちじようほうべん

じんみつきよう

しょうまんぎようとう

一乗方便なり。いわゆる深密經・勝鬘經等これなり。

てんだいちしやとう

むね わきま

とううんぬん

たいそう

けんおう

天台智者等はこの旨を弁えず」等云々。しかも太宗は賢王

とうじ な いってん

響

さんこう

超

なり。当時、名を一天にひびかすのみならず、三皇にもこえ

ごてい

すぐ

由 しかい

かんど

て

握

五帝にも勝れたるよし四海にひびき、漢土を手ににぎるの

こうしよう

こうらいとう

いつせんはつぴやくよく

靡

ないげ

みならず、高昌・高麗等の一千八百余国をなびかし、内外

きわ

おう

聞

けんおう

だいいち

ごきえ

そう

を極めたる王ときこえし賢王の第一の御帰依の僧なり。

てんだいしゅう

がくしや

なか

くび

指

出

ひといちにん

天台宗の学者の中にも頸をさしいだす人一人もなし。しか

ほけきよう

じつぎ

いつこく

おんもつ

れば、法華經の実義すでに一国に隠没しぬ。

おな

たいそう

たいし

こうそう

こうそう

けいぼ

そくてんこうごう

ぎよう

同じき太宗の太子・高宗、高宗の継母・則天皇后の御宇に、

ほうぞうほつし

もの

ほつそうしゅう

てんだいしゅう

襲

法蔵法師という者あり。法相宗に天台宗のおそわると

み

さき

てんだい

おんとき責

けごんぎよう

と

い

ころを見て、前に天台の御時せめられし華嚴經を取り出だ

いちだい なか けごん だいいち ほつけ だいに ねはん だいいさん た
して、一代の中には華嚴第一、法華第二、涅槃第三と立て
けり。

たいそう

だいいだい

げんそうこうてい

ぎょう

かいげんしねん

どうはちねん

太宗より第四代の玄宗皇帝の御宇、開元四年・同八年に、

さいてん いんど

ぜんむいさんぞう

こんごうちさんぞう

ふくうさんぞう

だいにちきよう

西天印度より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、大日経・

こんごうちきよう

そしつじきよう

たも

わた

しんこんしゅう

た

金剛頂経・蘇悉地経を持つて渡り、真言宗を立つ。この

しゅう

りゅうぎ

い

きよう

にしゆ

いち

しゃか

けんきよう

宗の立義に云わく「教に二種あり。一には釈迦の顕教。

けごん

ほつけとう

に

だいにち

みつきよう

いわゆる華嚴・法華等なり。二には大日の密教。いわゆる

だいにちきようとう

ほけきよう

けんきよう

だいいち

きよう

だいにち

大日経等なり。法華経は顕教の第一なり。この経は大日

みつきよう

たい

ごくり

すこ

おな

じそう

いんげい

の密教に対すれば極理は少し同じけれども、事相の印契と

しんごん

絶

見

さんみつそうおう

ふりようぎきよう

とう

真言とはたえてみえず。三密相応せざれば、不了義経」等

うんぬん

云々。

いじよう

ほつそう

けごん

しんごん

さんしゅういちどう

てんだいほつけしゅう

破

已上、法相・華嚴・真言の三宗一同に天台法華宗をやぶ

てんだいだいしほど

ちじん

ほつけしゅう

なか

れども、天台大師程の智人、法華宗の中になかりけるかの

ないない

謂

よし

ぞん

てんだい

あいだ、内々はゆわれなき由は存じけれども、天台のごと

こうじよう

ろん

かみこくおう

だいじん

しもいつさい

く公場にして論ぜられざりければ、上国王・大臣、下一切

にんみん

みなぶつぼう

まよ

しゅじよう

とくどう

止

の人民にいたるまで、皆仏法に迷つて衆生の得道みなとど

ぞうほう

のち

ごひやくねん

さき

にひやくよねん

うち

まりけり。これらは像法の後の五百年の前の二百余年が内

なり。

ぞうほう

い

しひやくよねん

もう

ひやくさいこく

像法に入つて四百余年と申しけるに、

百済国より

いつさいきよう

きようしゆしやくそん

もくぞう

そうにとう

にほんこく

渡

一切経ならびに教主釈尊の木像・僧尼等、

日本国にわた

かんど

りよう

まつ

ちん

はじ

相当

にほん

じんむ

る。漢土の梁の末、陳の始めにあいあたる。

日本には神武

てんのう

だいさんじゆうだい

きんめいてんのう

ぎよう

きんめい

みこ

天皇よりは第三十代、欽明天皇の御宇なり。

欽明の御子、

ようめい

たいし

じようぐうおうじ

ぶつぼう

ぐつう

たも

用明の太子に上宮王子、仏法を弘通し給うのみならず、な

ほけきよう

じようみようきよう

しyouまんぎよう

ちんごこつか

ほう

さだ

らびに法華経・浄名経・勝鬘経を鎮護国家の法と定め

たま

させ給いぬ。

のち

にんのうだいさんじゆうしちだい

こうとくてんのう

ぎよう

さんろんしゆう

その後、人王第三十七代に孝徳天皇の御宇に、三論宗・

じようじつしゆう

かんろくそうじよう

ひやくさいこく

渡

おな

みよ

成実宗を、観勒僧正、百済国よりわたす。同じき御代に

どうしようほつし

かんど

ほつそうしゅう

くしやしゅう

にんのう

道昭法師、漢土より法相宗・俱舎宗をわたす。人王

だいしじゅうしだいげんしやうてんのう

ぎやう

てんじく

だいにちきやう

第四十四代元正天皇の御宇に、天竺より大日経をわたし

ぐつう

かんど

帰

そう

てありしかども、しかも弘通せずして漢土へかえる。この僧

ぜんむいさんぞう

にんのうだいしじゅうごだい

しやうむてんのう

ぎやう

をば善無畏三蔵という。人王第四十五代に聖武天皇の御宇

しんじやうだいとく

しんらく

けこんしゅう

ろうべんそうじやう

に、審祥大徳、新羅国より華嚴宗をわたして、良弁僧正・

しやうむてんのう

授

とうだいじ

だいぶつ

た

聖武天皇にさずけたてまつりて、東大寺の大仏を立てさせ

たま

おな

みよ

だいとう

がんじんわしやう

てんだいしゅう

りつしゅう

給えり。同じき御代に、大唐の鑑真和尚、天台宗と律宗を

なか

りつしゅう

ぐつう

しやうじやう

かいじやう

とうだいじ

わたす。その中に律宗をば弘通し、小乗の戒場を東大寺

こんりゅう

ほつけしゅう

みやうじ

もう

い

に建立せしかども、法華宗のことをば名字をも申し出ださ

たま　にゆうめつ　お
せ給わずして入滅し了わんぬ。

のち　にんのうだいごじゆうだい　ぞうほうはつびやくねん　あいあ　かんむ
その後、人王第五十代、像法八百年に相当たつて、桓武

てんのう　ぎよう　さいちよう　もう　しようそうしゆつたい　のち　でんぎよう
天皇の御宇に、最澄と申す小僧出来せり。後には伝教

だいし　ごう　はじ　さんろん　ほつそう　けごん　くしゃ
大師と号したてまつる。始めには三論・法相・華嚴・俱舎・

じようじつ　りつ　ろくしゆう　ぜんしゆうとう　ぎようひようそうじようとう　しゆがく
成実・律の六宗ならびに禪宗等を行表僧正等に習学

たま　われ　た　たま　こくしようじ　のち　ひえいざん
せさせ給いしほどに、我と立て給える国昌寺、後には比叡山

ごう　ろくしゆう　ほんきよう　ほんろん　しゆうじゆう　にんし
と号す、ここにして六宗の本経・本論と宗々の人師の

しゃく　ひ　あ　ご　覧　か　しゆうじゆう　にんし
釈とを引き合わせ御らんありしかば、彼の宗々の人師の

しゃく　よ　きようろん　そうい　おお　うえ　びやつけんた　た
釈、依るところの経論に相違せること多き上、僻見多々

しんじゆ

ひと

みなあくどう

お

勘

たも

にして、信受せん人、皆惡道に墮ちぬべしとかんがえさせ給

うえ

ほけきよう

じつぎ

しゆうじゆう

ひとびと

われ

え

われ

う。その上、法華經の実義は、宗々の人々、我も得たり我

え

じさん

ぎ

もう

も得たりと自讃ありしかども、その義なし。これを申すな

けんかしゆつたい

黙

もう

ぶつせい

背

らば喧嘩出来すべし、もだして申さずば仏誓にそむきなん

思

煩

たま

つい

ほとけ

いまし

恐

とおもいわずらわせ給いしかども、終に仏の誠めをおそ

かんむこうてい

そう

たま

みかど

驚

れて桓武皇帝に奏し給いしかば、帝このことをおどろかせ

たま

ろくしゆう

せきがく

め

あ

たも

給いて、六宗の碩学に召し合わさせ給う。

か

がくしやとう

はじ

まんどうさん

あくしんどくじや

彼の学者等、始めは慢幢山のごとし。悪心毒蛇のような

つい

おう

まえ

責

落

ろくしゆう

しちじ

りしかども、終に王の前にしてせめおとされ、六宗・七寺、

いちどう みでし

れい

かんど

なんぼく

しよし

ちんでん

一同に御弟子となりぬ。例せば、漢土の南北の諸師、陳殿に

てんだいだいし

みでし

して天台大師にせめおとされて御弟子となりしがごとし。

えんじよう

えんえ

うえ

てんだいだいし

これはこれ円定・円慧ばかりなり。その上、天台大師のい

責

たま

しようじよう

べつじゆかい

ろくしゆう

まだせめ給わざりし小乗の別受戒をせめおとし、六宗の

はちだいとく

ぼんもうきよう

だいじようべつじゆかい

授

たも

八大徳に梵網經の大乗別受戒をさずけ給うのみならず、

ほけきよう

えんどん

べつじゆかい

えいざん

こんりゆう

えんりやくえんどん

法華經の円頓の別受戒を叡山に建立せしかば、延暦円頓

べつじゆかい

にほん だいいち

ほとけ

めつご

の別受戒は日本第一たるのみならず、仏の滅後

いっせんはつびやくよねん

あいだ

しんどく

しな

いちえんぶだい

一千八百余年が間、身毒・戸那・一閻浮提にいまだなかり

りようぜん

だいかい

にほんこく

はじ

し靈山の大戒、日本国に始まる。

でんぎようだいし

こう ろん

りゆうじゆ

てんじん

されば、伝教大師は、その功を論ずれば、竜樹・天親に

超

てんだい

みようらく

すぐ

しようにん

もこえ天台・妙楽にも勝れておわします聖人なり。され

にほんこく

とうせい

とうじ

おんじよう

しちだいじ

しよこく

はつしゆう

ば、日本国の当世の東寺・園城・七大寺、諸国の八宗、

じようど

ぜんしゆう

りつとう

しよそうとう

たればと

でんぎようだいし

えんかい

背

浄土・禅宗・律等の諸僧等、誰人か伝教大師の円戒をそむ

かんどきゆうこく

しよそうとう

えんじよう

えんえ

てんだい

くべき。かの漢土九国の諸僧等は、円定・円慧は天台の

でし

似

えんどんいちどう

かいじよう

かんど

かい

弟子ににたれども、円頓一同の戒場は漢土になれば、戒

でし

もの

にほんこく

においては弟子とならぬ者もありけん。この日本国は、

でんぎようだいし

みでし

ものげどう

あくにん

伝教大師の御弟子にあらざる者外道なり、悪人なり。

かんど

にほん

てんだいしゆう

しんごん

しyouれつ

だいし

しかれども、漢土・日本の天台宗と真言の勝劣は、大師、

しんちゆう

ぞんち

たま

ろくしゆう

てんだいしゆう

心中には存知せさせ給いけれども、六宗と天台宗とのご

こうじよう

しようぶ

でんぎようだいしいご

とく公場にして勝負なかりけるゆえにや、伝教大師已後

とうじ

しちじ

おんじよう

しよじ

にほんいつしゆういちどう

しんごんしゆう

には、東寺・七寺・園城の諸寺、日本一州一同に、真言宗

てんだいしゆう

すぐ

かみいちにん

しもばんにん

至

は天台宗に勝れたりと上一人より下万人にいたるまで

思

てんだいほつけしゆう

でんぎようだいし

おぼしめしおもえり。しかれば、天台法華宗は伝教大師の

おんとき

でんぎよう

おんとき

ぞうほう

まつ

御時ばかりにぞありける。この伝教の御時は、像法の末、

だいじつきよう

たぞうとうじけんご

とき

わ

ほう

なか

大集経の多造塔寺堅固の時なり。いまだ「我が法の中にお

こうじようごんしろう

びやくほうおんもつ

とき

当

いて闘諍言訟して白法隠没せん」の時にはあたらず。

いま

まつぼう

い

ひひやくよさい

だいじつきよう

わ

ほう

なか

今、末法に入つて二百余歳、大集経の「我が法の中にお

とうじようこんしよう

びやくほうおんもつ

とき

ぶつこ

いて鬭諍言訟して白法隠没せん」の時にあたれり。仏語

実

さだ

いちえんぶだい

とうじようお

じせつ

まことならば、定めて一閻浮提に鬭諍起こるべき時節なり。

つた

き

かんど

さんびやくろくじつかこくにひやくろくじゅうよしゅう

もう

伝え聞く、漢土は三百六十箇国二百六十余州はすでに蒙

ここく

う

破

からく

破

きそう

きんそう

古国に打ちやぶられぬ。華洛すでにやぶられて、徽宗・欽宗

りようてい

ほくばん

生

捕

だつたん

つい

隠

の両帝、北蕃にいけどりにせられて、韃靼にして終にかく

たま

きそう

まご

こうそうこうてい

ちようあん

攻

落

れさせ給いぬ。徽宗の孫・高宗皇帝は、長安をせめおとさ

いなか

りんあんあんざいふ

落

たま

いま

すうねん

あいだ

れて、田舎の臨安行在府におちさせ給いて、今に数年が間

みやこ

み

こうらいろつぴやくよく

しんら

ひやくさいとう

しよこくとう

みな

京を見ず。高麗六百余国も新羅・百濟等の諸国等も、皆、

だいもうここく

こうてい

攻

いま

にほんこく

いき

つしま

大蒙古国の皇帝にせめられぬ。今の日本国の壱岐・対馬な

きゆうこく

とうじようけんこ

ぶつこ

じ

お

らびに九国のごとし。鬪諍堅固の仏語、地に堕ちず。あ

たいかい

潮

とき

違

たかも、これ大海のしおの時をたがえざるがごとし。

あん

だいじつきよう

びやくほうおんもつ

とき

つ

これをもって案ずるに、大集経の白法隠没の時に次い

ほけきよう

だいびやくほう

にほんこく

いちえんぶだい

こうせんるふ

で、法華経の大白法の日本国ならびに一閻浮提に広宣流布

うたが

か

だいじつきよう

ぶつせつ

なか

せんことも疑うべからざるか。彼の大集経は仏説の中の

ごんだいじよう

しやうじ

離

どう

ほけきよう

けちえん

もの

権大乘ぞかし。生死をはなるる道には法華経の結縁なき者

みけんしんじつ

ろくどう

ししやう

さんぜ

しる

のためには未顕真実なれども、六道・四生・三世のことを記

たま

すんぶん

違

し給いけるは寸分もたがわざりけるにや。いかにいわんや、

ほけきよう

しやくそん

かなら

まさ

しんじつ

と

法華経は、釈尊は「要ず当に真実を説きたもうべし」と

名乗 たま たほうぶつ しんじつ ごはん 添 じつぼう

なのらせ給い、多宝仏は「真実なり」と御判をそえ、十方の

しよぶつ こうちようぜつ ぼんてん じようたい さ しめ しやくそん

諸仏は広長舌を梵天につけて「誠諦」と指し示し、釈尊

かさ むこもう した しきくきよう つ たま のち

は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給いて、後の

ごひやくさい いっさい ぶつぼう めつ とき じようぎようぼさつ みようほうれんげきよう

五百歳に一切の仏法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華經

ごじ 持 ほうぼう いっせんだい びやくらいびよう やから ろうやく

の五字をもたしめて、謗法・一闍提の白癩病の輩の良薬

ぼんたい にちがつ してん りゆうじゆとう おお 付 きんげん

とせんと、梵帝・日月・四天・竜神等に仰せつけられし金言、

こもう だいち はんぷく こうざん たいらく はる

虚妄なるべしや。大地は反覆すとも、高山は頽落すとも、春

のち なつ きた ひ ひがし 還 つき ち お

の後に夏は来らずとも、日は東へかえるとも、月は地に落

いちじよう

つとも、このことは一定なるべし。

いちじよう

とうじようけんご

とき

にほんこく

おうしん

このこと一定ならば、鬭諍堅固の時、日本国の王臣と

ばんみんとう

ほとけ

おんつか

なんみようほうれんげきよう

ならびに万民等が、仏の御使いとして南無妙法蓮華経を

るふ

めり

あつく

流布せんとするを、あるいは罵詈し、あるいは悪口し、あ

るざい

ちようちやく

でし

けんぞくとう

しゅじゅ

なん

るいは流罪し、あるいは打擲し、弟子・眷属等を種々の難

遭

ひとびと

あんのん

そうろう

にあわする人々、いかでか安穩にては候べき。これをば

ぐち

もの

じゅそ

思

ほけきよう

弘

もの

愚癡の者は呪詛すとおもいぬべし。法華経をひろむる者は、

にほん

いっさいしゅじよう

ふぼ

しやうあんだいしい

かれ

日本の一切衆生の父母なり。章安大師云わく「彼がために

あく

のぞ

すなわ

かれ

おや

とううんぬん

にちれん

悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。されば、日蓮

とうてい

ふぼ

ねんぶつしや

ぜんしゆう

しんごんしとう

しはん

は、当帝の父母、念仏者・禅衆・真言師等が師範なり、ま

しゅくん

かみいちにん

しもばんみん

至

怨

た主君なり。しかるを、上一人より下万民にいたるまであだ

にちがつ

かれ

いただき

て

たも

をなすをば、日月いかでか彼らの頂を照らし給うべき。

ちじん

かれ

あし

の

たも

地神いかでか彼らの足を載せ給うべき。

だいばだった

ほとけ

う

だいちようどう

提婆達多は仏を打ちたてまつりしかば、大地揺動して

かえん出

だんみらおう

ししそんじや

こうべ

き

みぎ

火炎いでにき。檀弥羅王は師子尊者の頭を切りしかば、右

て
かたな

お

きそうこうてい

ほうどう

かお

火

印

の手、刀とともに落ちぬ。徽宗皇帝は法道が面にかなやき

焼

こうなん

流

はんとし

うち

夷

て

掛

をやきて江南にながせしかば、半年が内にえびすの手にか

たま

もうこ

責

かり給いき。蒙古のせめもまたかくのごとくなるべし。た

ごてん

兵

集

てっちせん

しろ

とい五天のつわものをあつめて鉄圀山を城とせりとも、

敵 かなら にほんこく いっさいしゅじょう ひょうなん あ

かなうべからず。必ず日本国の一切衆生、兵難に値うべ

にちれん ほけきょう ぎょうじや

し。されば、日蓮が法華經の行者にてあるなきかは、これ

み

にて見るべし。

きょうしゅしやくそん しる のたま まっだいあくせ ほけきょう ぐつう

教主釈尊、記して云わく「末代惡世に法華經を弘通す

あつく めりとう ひと われ いっこう あいだ 怨 もの

るものを惡口・罵詈等せん人は、我を一劫が間あだせん者

つみ ひやくせんまんおくばい 過 説 たま

の罪にも百千万億倍すぎたるべし」ととかせ給えり。しか

いま にほんこく こくしゅ ばんみんとう 雅意 任 ふぼ

るを、今の日本国の国主・万民等、がいにかかせて、父母・

しゅくせ かたき 甚 憎 むほん さつがい もの 強

宿世の敵よりもいたくにくみ、謀反・殺害の者よりもつよ

責 げんしん だいち 破 い てんらい み 裂

くせめぬるは、現身にも大地われて入り、天雷も身をさか

ふしん

にちれん

ほけきよう

ぎようじや

ざるは不審なり。日蓮が法華經の行者にてあらざるか。も

大

歎

こんじよう

ばんにん

責

ししからば、おおきになげかし。今生には万人にせめられ

かたとき

安

ごしよう

あくどう

お

浅

て片時もやすからず、後生には悪道に堕ちんことあさまし

もう

とも申すばかりなし。

にちれんほけきよう

ぎようじや

もの

いちじよう

また、日蓮法華經の行者ならずば、いかなる者の一乗の

じしや

ほうねん

ほけきよう

抛

捨

ぜんどう

持者にてはあるべきぞ。法然が「法華經をなげすてよ」、善導

せん

なか

ひと

な

どうしやく

いちにん

う

もの

が「千の中に一りも無し」、道綽が「いまだ一人も得る者あ

もう

ほけきよう

ぎゆじや

そうろう

こうぼうだいし

らず」と申すが法華經の行者にて候べきか。また弘法大師

い

ほけきよう

ぎよう

けろん

書

の云わく「法華經を行ずるは戲論なり」とかかれたるが

ほけきよう ぎようじや

きようもん

よ

きよう

たも

法華經の行者なるべきか。經文には「能くこの經を持つ」

よ きよう と

説

そうら

能 説

「能くこの經を説く」なんどこそとかれて候え。「よくと

もう

もう

しよきよう

なか

もつと

く」と申すはいかなるぞと申すに、「諸經の中において最

かみ

あ

もう

だいにちきよう

けごんぎよう

ねはんぎよう

もその上に在り」と申して、「大日經・華嚴經・涅槃經・

はんにやきようとう

ほけきよう

勝

そうろう

もう

もの

般若經等に法華經はすぐれて候なり」と申す者をこそ、

きようもん

ほけきよう

ぎようじや

説

そうら

きようもん

經文には法華經の行者とはとかれて候え。もし經文の

にほんこく

ぶつぼう

しちひやくよねん

でんぎようだいし

ごとくならば、日本国に仏法わたつて七百余年、伝教大師

にちれん

ほか

いちにん

ほけきよう

ぎようじや

無

と日蓮とが外は一人も法華經の行者はなきぞかし。

思

こうべわ

しちぶん

な

いかにいかにとおもうところに、「頭破れて七分に作る」

くち すなわ へいそく

どうり

そうら

「口は則ち閉塞せん」のなかりけるは、道理にて候いけ

あさ ばち

いちにんににんとう

るなり。これらは浅き罰なり。ただ一人二人等のことなり。

にちれん えんぶだいいち ほけきよう ぎようじや

謗

日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。これをそしり、これ

怨 ひと けつこう ひと

えんぶだいいち だいなん 遭

をあだむ人を結構せん人は、閻浮第一の大難にあうべし。

にほんこく 震 揺

しょうか おおじしん いってん ばつ

これは日本国をふりゆるがす正嘉の大地震、一天を罰する

ぶんえい だいすいせいとう

文永の大彗星等なり。

見 ほとけめつど のち ぶつぼう ぎよう もの 怨

これらをみよ。仏滅度の後、仏法を行ずる者にあだを

いま だいなん いちど

なすといえども、今のごとくの大難は一度もなきなり。

なんみようほうれんげきよう いっさいしゆじよう 勸 ひといちにん

南無妙法蓮華經と一切衆生にすすめたる人一人もなし。こ

の徳は、たれか一天に眼を合わせ、四海に肩をならぶべきや。

疑つて云わく、たとい正法の時は仏の在世に対すれば根機劣なりとも、像・末に対すれば最上の上機なり。いか

でか正法の始めに法華經をば用いざるべき。したがつて、馬鳴・竜樹・提婆・無著等も正法一千年の内にこそ出現せさせ給え。天親菩薩は千部の論師、法華論を造つて諸經

の中に第一の義を存す。真諦三蔵の相伝に云わく「月支に法華經を弘通せる家、五十余家。天親はその一なり」。已上、

しようほう

正法なり。

ぞうほう い

てんだいだいしぞうほう

なか

かんど

しゅつげん

像法に入つては、天台大師像法の半ばに漢土に出現して、

げん もん し

さんじつかん

つく

ほけきよう

えんदै

きわ

玄と文と止との三十巻を造つて、法華經の淵底を極めたり。

ぞうほう まつ

でんぎようだいしにほん

しゅつげん

てんだいだいし

えんえ

像法の末に伝教大師日本に出現して、天台大師の円慧・

えんじよう

にほう

わ

ちよう

ぐつう

えんどん

円定の二法を我が朝に弘通せしむるのみならず、円頓の

だいかいじよう

えいざん

こんりゆう

にほんいつしゅうみなおな

えんかい

じ

大戒場を叡山に建立して日本一州皆同じく円戒の地に

かみいちにん

しもばんみん

えんりやくじ

しはん

あお

たも

なして、上一人より下万民まで延暦寺を師範と仰がせ給う

ぞうほう

とき

ほけきよう

こうせんるふ

は、あに像法の時、法華經の広宣流布にあらずや。

こた

い

によらい

きようほう

かなら

き

したが

答えて云わく、如来の教法は必ず機に随うということ

せけん がくしゃ ぞんち

ほとけ おし

然

は、世間の学者の存知なり。しかれども、仏の教えはしか

じょうこん じょうち ひと

かなら だいほう と

らず。上根・上智の人のために必ず大法を説くならば、

しよじょうどう

とき

ほけきよう

説

たま

しようほう

さき

初成道の時なんぞ法華經をとかせ給わざる。正法の先の

ごひやくよねん

だいじようきよう

ぐつう

うえん

ひと

だいほう

五百余年に大乘經を弘通すべし。有縁の人に大法を

と

たも

じようぼんだいおう

まやぶにん

かんぶつざんまいきよう

説かせ給うならば、淨飯大王・摩耶夫人に觀仏三昧經・

まやきよう

説

むえん

あくにん

ほうぼう

もの

ひほう

摩耶經をとくべからず。無縁の悪人・謗法の者に秘法をあ

かくとくびく

むりよう

はかい

もの

ねはんぎよう

授

たえずば、覺徳比丘は無量の破戒の者に涅槃經をさずくべ

ふきようぼさつ

ひぼう

ししゆ

む

ほけきよう

からず。不輕菩薩は誹謗の四衆に向かつて、いかに法華經を

るつう

たま

き

したが

ほう

と

もう

ば流通せさせ給いしぞ。されば、機に随つて法を説くと申

すは、大いなる僻見なり。
おほ びやつけん

問うて云わく、竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給
と い りゆうじゆ せしんとう ほけきよう じつぎ の たま

わずや。

答えて云わく、宣べ給わず。
こた い の たま

問うて云わく、いかなる教えをかのべ給いし。
と い おし 宣 たま

答えて云わく、華嚴・方等・般若・大日經等の権大乘、
こた い けごん ほうどう はんにや だいにちきようとう ごんだいじよう

顕密の諸經をのべさせ給いて、法華經の法門をば宣べさせ
けんみつ しよきよう 宣 たま

給わず。
たま

問うて云わく、何をもつてこれをしるや。
と い なに 知

こた い りゆうじゅぼさつ つく んん さんじゅうまんげ
答えて云わく、竜樹菩薩の造るところの論、三十万偈。

しかれども、^つ 尽くして漢土・日本にわたらざれば、その心 ^{こころ}

知

しりがたしといえども、漢土にわたれる十住毘婆沙論・

ちゅうろん

だいろんとう

てんじく

ろん

ひち

し

中論・大論等をもつて天竺の論をも比知してこれを知るな

り。

うたが

い

てんじく

のこ

ろん

なか

渡

ろん

疑って云わく、天竺に残る論の中に、わたれる論よりも

すぐ

ろん

勝れたる論やあるらん。

こた

い

りゆうじゅぼさつ

わたくし

もう

答えて云わく、竜樹菩薩のことは私に申すべからず。

ほとけしる

たも

わ

めつご

りゆうじゅぼさつ

もう

ひと

なんてんじく

い

仏記し給う。「我が滅後に竜樹菩薩と申す人、南天竺に出

ずべし。彼の人の所詮は中論という論に有るべし」と。仏ほとけ

しるしも たもたも したがしたが りゆうじゅぼさつりゆうじゅぼさつ ながなが てんじくてんじく しちじつけしちじつけ

記し給うに随つて、竜樹菩薩の流れ天竺に七十家あり。

しちじゅうにんしちじゅうにん

だいろんじだいろんじ

か

しちじつけしちじつけ

ひとびとひとびと

みな ちゅうろんみな ちゅうろん

七十人ともに大論師なり。彼の七十家の人々は、皆、中論

もと

ちゅうろんしかんにじゅうしちほんちゅうろんしかんにじゅうしちほん

かんじんかんじん

いんねんいんねん

しょうしょう

を本とす。中論四卷二十七品の肝心は「因縁もて生ずる

ほう

しく

げ

しく

げ

けごんけごん

はんにやとうはんにやとう

ところの法」の四句の偈なり。この四句の偈は華嚴・般若等

しきよう

さんたいさんたい

ほうもんほうもん

ほっけかいえほっけかいえ

さんたいさんたい

の たまの たま

の四教・三諦の法門なり。いまだ法華開会の三諦をば宣べ給

わす。

うたが

い

なんじなんじ

りようけんりようけん

ひと

疑つて云わく、汝がごとくに料簡せる人ありや。

こた

い

てんだいてんだい

ちゅうろんちゅうろん

あいひあいひ

答えて云わく、天台云わく「中論をもつて相比すること

なかれ」。また云わく「天親・竜樹、内に鑑みるに冷然に

いと とき よろ かな とううんぬん みょうらくい

して、外には時の宜しきに適う」等云々。妙楽云わく「も

はえ ろん ほつけ ゆえ うんぬん じゅうぎ

し破会を論ぜば、いまだ法華にしかざるが故に」云々。従義

い りゅうじゆ てんじん てんだい うんぬん

云わく「竜樹・天親、いまだ天台にしかず」云々。

と い とう まつ ふくうさんそう いっかん ろん 渡

問うて云わく、唐の末に不空三蔵、一卷の論をわたす。

な ぼだいしんろん 名 りゅうみようぼさつ ぞう うんぬん

その名を菩提心論となづく。竜猛菩薩の造なり云々。

こうぼうだいしい ろん りゅうみようせんぶ なか だいいちかんじん ろん

弘法大師云わく「この論は竜猛千部の中の第一肝心の論」

うんぬん

と云々。

こた い ろん いちぶしちちよう りゅうみよう ことば

答えて云わく、この論、一部七丁あり。竜猛の言な

らぬこと、処々に多し。故に、目録にも、あるいは竜猛、

ふくう

りようほう

ことさだ

うえ

あるいは不空と両方なり。いまだ事定まらず。その上、こ

ろんもん

いちだい

くく

ろん

こうりよう

おお

の論文は一代を括れる論にもあらず。荒量なることこれ多

ただしんごん

ほう

なか

かんじん

もん

誤

し。まず「唯真言の法の中にのみ」の肝心の文あやまりな

ゆえ

もんしよう

げんしよう

ほけきよう

そくしんじようぶつ

無

り。その故は、文証・現証ある法華經の即身成仏をばな

もんしよう

げんしよう

跡

形

無

しんごんきよう

きになして、文証も現証もあとかたもなき真言經に

そくしんじようぶつ

た

そうろう

ただ

ただ

いちじ

即身成仏を立てて候。また「唯」という「唯」の一字は

だいいち

こと

体

み

ふくうさんぞう

わたくし

第一のあやまりなり。事のていを見るに、不空三蔵の私に

造

そうろう

とき

ひと

重

つくりて候を、時の人におもくせさせんがために事を

こと

竜猛によせたるか。

うえ ふくうさんぞう あやま

数多

その上、不空三蔵は誤ること、かずおおし。いわゆる、

ほけきよう かんち ぎき じゆりようほん あみだぶつ め まえ

法華經の觀智の儀軌に寿量品を阿弥陀仏とかける眼の前

だいびやつけん だらにほん じんりきほん つぎ 置 ぞくろいほん きようまつ

の大僻見、陀羅尼品を神力品の次における、囑累品を経末

くだ 言 甲斐 み てんだい

に下せる、これらはいうかいなし。さるかと思れば、天台の

だいじようかい めす だいそうこうてい せんじ もう ごだいさん ごじ た

大乘戒を盗んで代宗皇帝に宣旨を申し、五台山の五寺に立

しんごん きようそう てんだいしゅう

てたり。しかもまた、真言の教相には天台宗をすべしと

おうわく こと た ひと やく

いえり。かたがた誑惑の事どもなり。他の人の訳ならば、用

ひと やく きようろん しん

いることもありなん。この人の訳せる経論は信ぜられず。

そう がつし かんど きようろん 渡 ひと くやく しんやく

総じて月支より漢土に経論をわたす人、旧訳・新訳に

いっぴやくはちじゅうろくにん らじゅうさんぞういちにん のぞ

一百八十六人なり。羅什三蔵一人を除いては、いずれの

ひとびと あやま なか ふくうさんぞう こと あやま おお

人々も誤らざるはなし。その中に不空三蔵は殊に誤り多

うえ おうわく こころあらわ

き上、誑惑の心顕なり。

うたが い なに し らじゅうさんぞう ほか

疑つて云わく、何をもつて知るぞや、羅什三蔵より外の

ひとびと 誤 なんじ ぜんしゅう ねんぶつ しんごんとう しちしゅう

人々はあやまりなりとは。汝が禅宗・念仏・真言等の七宗

やぶ かんど にほん 渡 いっさい やくしゃ もち

を破るのみならず、漢土・日本にわたる一切の訳者を用い

ざるか、いかん。

こた い よ だいいち ひじ いさい

答えて云わく、このことは余が第一の秘事なり。委細に

は向むかつて問とうべし。ただし、すこし申もうすべし。羅什三蔵の

い われかんど いっさいきよう み みなぼんご

云わく「我漢土の一切経を見るに、皆梵語のごとくならず。

あらわ

いかでかこのことを顕すべき。ただし一つの大願あり。身み

ふじよう め 帶 した しょうじよう

を不浄になして妻をたいすべし。舌ばかり清浄になして

ぶつぽう もうご われし かなら 焼

仏法に妄語せじ。我死なば必ずやくべし。焼かん時、舌焼

わ きよう 捨 つね こうぎ 説

くるならば、我が経をすてよ」と、常に高座にしてとかせ

たま かみいちにん しもぼんみん がん

給いしなり。上一人より下万民にいたるまで願じて云わく

ねが らじゆうさんぞう のち し つい し たも のち

「願わくは羅什三蔵より後に死せん」と。終に死し給う後、

や ふじよう み みなはい おんした

焼きたてまつりしかば、不浄の身は皆灰となりぬ。御舌ば

かちゆう しょうれんげしょう

うえ

ごしき

こうみよう

はな

かり火中に青蓮華生じてその上にあり。五色の光明を放

よる ひる

ひる にちりん おんひかり

奪 たま

つて夜は昼のごとく、昼は日輪の御光をうばい給いき。さ

いつさい やくにん

きようぎよう かる

らじゅうさんぞう やく

てこそ、一切の訳人の経々々々は軽くなりて、羅什三蔵の訳し

たま きようぎよう

こと ほけきよう

かんど

易々

弘

給える経々々、殊に法華経は、漢土にはやすやすとひろま

そちら

り候いしか。

うたが い

らじゅう いぜん

いご ぜんむい

疑って云わく、羅什已前はしかるべし。已後の善無畏・

ふくうとう

不空等は、いかん。

こた い いご

やくしや した や

あやま

答えて云わく、已後なりとも、訳者の舌の焼くるをば、誤

知

にほんこく

ほつそうしゅう

流行

りありけりとしるべし。されば、日本国に法相宗のはやり

でんぎようだいしせ

たま

らじゆうさんぞう

したや

たりしを伝教大師責めさせ給いしには、「羅什三蔵は舌焼

げんじよう

じおん

したや

責

たま

かん

けず。玄奘・慈恩は舌焼けぬ」とせめさせ給いしかば、桓

むてんのう

どうり

思

てんだいほつけしゅう

移

たま

武天皇は道理とおぼして、天台法華宗へはうつらせ給いし

なり。

ねはんぎよう

だいさん

だいくとう

見

わ

ぶつぼう

涅槃經の第三・第九等をみまいらすれば、「我が仏法は

がつし

たこく

渡

とき

おお

みようごしゆつたい

しゆじよう

月支より他国へわたらんの時、多くの謬誤出来して衆生

とくどう

薄

説

そうろう

みようらくだいし

の得道うすかるべし」ととかれて候。されば、妙楽大師

しんたい

ひと

あ

なん

しょうし

かか

は「ならびに進退は人に在り。何ぞ聖旨に関わらん」とこ

そうら

いま

ひとびと

きよう

ごせ

そあそばされて候え。今の人々、いかに経のままに後世を

願

誤

きようぎよう

願

とくどう

ねがうとも、あやまれる経々のままにねがわば、得道も

ほとけ おん 失

書

あるべからず。しかればとても仏の御とがにはあらずとか

そうろう

ぶつきよう

なら ほう

だいしよう

ごんじつ

けんみつ

かれて候。仏教を習う法には、大小・権実・顕密はさ

だいいち

だいい

そうろう

ておく、これこそ第一の大事にては候らめ。

うたが

い

しょうほういつせんねん

ろんじ

ないしん

ほけきよう

疑つて云わく、正法一千年の論師の、内心には法華経の

じつぎ

けんみつ

しよきよう

ちようか

由

知

実義の顕密の諸経に超過してあるよしはしろしめしながら

そと

せんぜつ

ごんだいじよう

の

たも

ら、外には宣説せずしてただ権大乘ばかりを宣べさせ給う

覚

ことは、しかるべしとはおぼえねども、その義はすこしきこ

ぎ

少

聞

そうら

ぞうほういつせんねん

なか

てんだいちしやだいししゆつげん

え候いぬ。像法一千年の半ばに天台智者大師出現して、

だいもく みようほうれんげきよう ごじ げんぎじつかんいつせんまい 書 尽

題目の妙法蓮華經の五字を玄義十卷一千枚にかきつくし、

もんぐじつかん はじ われき お

文句十卷には始め「かくのごときを我聞きき」より終わり

らい な さ いちじいづく いんねん

「礼を作して去りにき」にいたるまで、一字一句に因縁・

やつきよう ほんじやく かんじん よつ しゃく 並 いっせんまい

約教・本迹・觀心の四つの釈をならべて、また一千枚に

つ たも いじよう げんぎ もんぐ にじつかん いっさいきよう こころ

尽くし給う。已上、玄義・文句の二十卷には、一切經の心

こうが ほけきよう たいかい 譬 じつぽうかい ぶつぽう つゆ

を江河として法華經を大海にたとえ、十方界の仏法の露

いったい も みようほうれんげきよう たいかい い たま

一諦も漏らさず妙法蓮華經の大海に入れさせ給いぬ。その

うえ てんじく だいろん しょぎいつてん 漏 かんど なんぼく じつし

上、天竺の大論の諸義一点ももらさず、漢土の南北の十師の

ぎ は 破 と もち

義、破すべきをばこれをはし、取るべきをばこれを用いる。

うえ しかんじつかん しる いちだい かんもん いちねん 統 じつかい
その上、止観十巻を注して一代の観門を一念にすべ、十界の

えしよう さんぜん 縮 しょ もんたい とお がっし

依正を三千につづめたり。この書の文体は、遠くは月支

いつせんねん あいだ ろんじ こ ちか し なごひやくねん にんし

一千年の間の論師にも超え、近くは尸那五百年の人師の

しゃく すぐ

釈にも勝れたり。

ゆえ さんろんしゆう きちぞうだいし なんぼくいつぴやくよにん せんだつ ちようじゃ

故に、三論宗の吉蔵大師、南北一百余人の先達と長者ら

勸 てんだいだいし こうきよう き じよう い

をすすめて、天台大師の講経を聞かんとする状に云わく

せんねん ごひやく じつ こんにち あ ないしなんかく えいしよう てんだい

「千年と五百、実にまた今日に在り乃至南岳の叡聖、天台

みようてつ むかし さんごう じゆうじ いま にそんしやうけい

の明哲、昔は三業もて住持し、今は二尊紹係す。あにた

かんろ しんたん そそ まさ ほつく てんじく ふる

だ甘露を震旦に灑ぐのみならん。また当に法鼓を天竺に震

しょうち みようご

ぎしん

いらい

てんせき

ふうよう

うべし。生知の妙悟は、魏晋より以来にして、典籍・風謡に

まこと

れんるいな

ないしぜんしゅいつびやくよ

そう

ちしやだいし

も、実に連類無し乃至禅衆一百余の僧とともに、智者大師

ぶじよう

とううんぬん

しゅうなんざん

どうせんりつし

てんだいだいし

さんだん

を奉請す」等云々。終南山の道宣律師、天台大師を讃歎し

い

ほつけ

しやうりよう

こうき

ゆうこく

のぼ

て云わく「法華を照了すること高輝の幽谷に臨むがごと

まかえん

と

ちやうふう

たいきよ

あそ

に

く、摩訶衍を説くこと長風の大虚に遊ぶに似たり。たとい

もんじ

しせんぐんまんしゅ

か

みやうべん

たず

よ

文字の師千群万衆あつてしばしば彼の妙弁を尋ぬとも、能

きわ

ものな

ないしぎ

つき

さ

おな

ないししゆう

く窮むる者無きなり乃至義は月を指すに同じ乃至宗は

いちごく

き

うんぬん

けこんしゆう

ほうぞうほつし

てんだい

さん

い

一極に帰す」云々。華嚴宗の法蔵法師、天台を讃して云わ

しぜんじ

ちしやとう

じんい

かんつう

しやく

とうい

く「思禅師・智者等のごときは、神異・感通は、迹、登位に

さん りようぜん ちようぼう おも いま あ とううんぬん
参じ、靈山の聴法は、憶い今に在り」等云々。

しんごんしゅう ふくうさんぞう がんこうほつしとう していとも しんごんしゅう 捨
真言宗の不空三蔵・含光法師等、師弟共に真言宗をすて

てんだいだいし きぶく ものがたり い こうそうでん い
て天台大師に帰伏する物語に云わく、高僧伝に云わく

ふくうさんぞう まのあた てんじく あそ そうあ と
「不空三蔵と親り天竺に遊びたるに、かしこに僧有り。問

い だいとう てんだい きようしやくあ もつと じやしろう えら へん
うて曰わく『大唐に天台の教迹有り。最も邪正を簡び偏

えん あき た よ やく ど も
円を曉らむるに堪えたり。能くこれを訳してこの土に将ち

いた とううんぬん ものがたり がんこう みようらくだいし
至らしむべきや』と」等云々。この物語は含光が妙楽大師

たま みようらくだいし ものがたり き い
にかたり給いしなり。妙楽大師、この物語を聞いて云わ

ちゅうごく ほう うしな しい もと
く「あに中国に法を失つてこれを四維に求むるにあらず

や。しかるにこの方に識ることある者少なし。魯人のごと

とううんぬん

しんどくこく

なか

てんだいさんじつかん

だいろん

し」等云々。身毒国の中に天台三十巻のごとくなる大論あ

なんてん

そう

かんど

てんだい

しゃく

願

るならば、南天の僧、いかでか漢土の天台の釈をねがうべ

ぞうほう

なか

ほけきよう

じつぎあらわ

なんえんぶだい

き。これあに、像法の中に法華經の実義顕れて、南閻浮提

こうせんるふ

に広宣流布するにあらずや。

こた

い

しょうほういつせんねん

ぞうほう

さき

しひやくねん

いじようほとけ

答えて云わく、正法一千年、像法の前の四百年、已上仏

めつごいつせんしひやくよねん

ろんじ

ぐつう

たま

いちだい

の滅後一千四百余年にいまだ論師の弘通し給わざる一代

ちようか

えんじよう

えんえ

かんど

ぐつう

たも

な

超過の円定・円慧を漢土に弘通し給うのみならず、その声、

がっし

聞

ほけきよう

こうせんるふ

似

月氏までもきこえぬ。法華經の広宣流布にはにたれども、

いまだ円頓えんどんの戒壇かいだんを立てられず。小乗しょうじょうの威儀いぎをもつて円えん

の慧・定え じょうに切りつけるは、すこし便りなきにきにたり。例れいせ

ば、日輪にちりんの蝕しょくするがごとし、月輪げつりんのかけたるに欠にたり。い

かにいおうや、天台大師てんだいだいしの御時おんときは大集經だいじつきやうの読誦多聞堅固どくじゆたもんけんこの

時ときにあいあたつて、いまだ広宣流布こうせんるふの時ときにあらず。

問とうて云わく、伝教大師でんぎやうだいしは日本国にほんこくの士ひとなり。桓武かんむの御宇ぎやう

に出世しゆつせして、欽明きんめいより二百余年にひやくよねんが間あいだの邪義じゃぎをなんじやぶり、
に難破は

てんだいだいしえんえ 撰えんじやう たも 鑑真和尚かんじんわじやう

の弘通くつうせし日本にほんの小乗しょうじょうの三処さんしよの戒壇かいだんをなんじやぶり、

えいざん えんどん だいじようべつじゆかい こんりゆう

だいじ ほとけ めつ

叡山に円頓の大乗別受戒を建立せり。この大事は仏の滅

ごいっせんはつびやくねん あいだ しんどく しな ふそう ないしいちえんぶだいいいち

後一千八百年が間の身毒・戸那・扶桑、乃至一閻浮提第一

きじ ないしよう りゆうじゆ てんだいとう

おと

の奇事なり。内証は竜樹・天台等にはあるいは劣るにも

おな

ぶつぼう ひと

いっぼう

や、あるいは同じくもやあるらん。仏法の人をすべて一法と

りゆうじゆ

てんじん

超

なんかく

てんだい

勝

なせることは、竜樹・天親にもこえ、南岳・天台にもすぐ

み

たも

そう

によらいごにゆうめつ

のち

れて見えさせ給うなり。総じては、如来御入滅の後

いっせんはつびやくねん

あいだ

ににん

ほけきよう

ぎようじや

一千八百年が間、この二人こそ法華經の行者にてはおわ

すれ。

ゆえ

しゅうく

い

きよう

い

しゆみ

と

故に、秀句に云わく「經に云わく『もし須弥を接つて、

たほう むしゆ ぶつど な お

他方の無数の仏土に擲げ置かんも、またいまだ難しとなさ

ないし ほとけめつ のち あくせ なか よ きよう

ず乃至もし仏滅して後、悪世の中において、能くこの経を

と すなわ かた どううんぬん きよう しやく

説かば、これは則ち難しとなす』と」等云々。この経を釈

い あさ やす ふか かた しやく しよはん

して云わく「浅きは易く深きは難しとは、釈迦の所判なり。

あさ き ふか つ じようぶ ところ てんだいだいし

浅きを去つて深きに就くは、丈夫の心なり。天台大師は

しやく しんじゆん ほつけしゆう たす しんたん ふよう えいざん いつけ

釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は

てんだい そうじよう ほつけしゆう たす にほん ぐつう うんぬん しやく

天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」云々。釈の

ところ げんごうだいく げん にんじゆひやくさい とき によらいざいせごじゆうねん

心は、賢劫第九の滅、人寿百歳の時より、如来在世五十年、

めつごいつせんはつびやくよねん ちゆうげん たか じゅうろくまんはつせんじゆん

滅後一千八百余年が中間に、高さ十六万八千由旬・

ろっぴやくろくじゅうにまんり こんぜん ひとあ ごしやく しょうしん て

六百六十二万里の金山を、人有つて五尺の小身の手をもつ

ほういつすんにすんとう がりやく 握 いっちようにちよう 投

て方一寸二寸等の瓦礫をにぎりて一丁二丁までなぐるが

すずめ 飛 速 てつちせん そと 投 もの

ごとく、雀鳥のとぶよりもはやく鉄圀山の外へなぐる者は

ほけきよう ほとけ 説 たま と ひと

ありとも、法華経を仏のとかせ給いしように説かん人は

まつぼう 希 てんだいだいし でんぎようだいし ぶつせつ

末法にはまれなるべし。天台大師・伝教大師こそ仏説に

そうじ 説 たま ひと てんじく

相似してとかせ給いたる人にておわすれとなり。天竺の

ろんじ ほけきよう 行 着 たま かんど てんだいいぜん

論師は、いまだ法華経へゆきつき給わず。漢土の天台已前の

にんし 過 足 じおん ほうぞう ぜんむい

人師は、あるいはすぎ、あるいはたらず。慈恩・法蔵・善無畏

とう ひがし にし てん ち もう ひとびと

等は、東を西といい、天を地と申せる人々なり。

でんぎようだいし

じさん

い

えんりやく

これらは伝教大師の自讃にはあらず。去ぬる延暦

にじゅういちねんしょうがつじゅうくにち

たかおさん

かんむこうていみゆき

二十一年正月十九日、高雄山に桓武皇帝行幸なりて、

ろくしゅうしちだいじせきとく

ぜんぎしょうゆうほうきちようになけんぎよく

六宗・七大寺の碩徳たる善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・

あんぶくごんそうしゆえんじこうげんようさいこうどうしようこうしようかんびんとう

安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等

じゅううよになさいちようほつしめあ

しゅうろん

の十有余人、最澄法師と召し合わせられて宗論ありしに、

いちごんしたま

にごんさんごんおよ

みないちどうこうべ

あるいは一言に舌を巻いて二言三言に及ばず、皆一同に頭

傾て

さんろんにぞうさんじさんてんぼうりんほつそう

をかたづけ、手をあざう。三論の一藏・三時・三転法輪、法相

さんじごしょうけごんしゅうしきようごきようこんぽんしまつろくそうじゅうげん

の三時・五性・華嚴宗の四教・五教・根本枝末・六相・十玄、

みなたいこう

破

れい

だいおくとうりよう折

皆大綱をやぶらる。例せば、大屋の棟梁のおれたるがごと

し。十大徳の慢幢も倒れにき。

じゆうだいとく

まんどう

たお

とき

てんしおお

おどろ

たま

おな

にじゆうくにち

ひろ

その時、天子大いに驚かせ給いて、同じき二十九日に広

よ

くにみち

りようり

ちよくし

かき

しちじ

ろくしゆう

おお

くだ

世・国道の両吏を勅使として、重ねて七寺・六宗に仰せ下

おのおのきぶく

じよう

の

い

てんだい

されしかば、各々帰伏の状を載せて云わく「ひそかに天台

げんじよ

み

そう

しやかいちだい

おし

くく

悉

の玄疏を見れば、総じて釈迦一代の教えを括つてことごと

おもむき

あらわ

つう

な

ひと

しよしゆう

こ

くその趣を顕すに通ぜざるところ無く、独り諸宗に逾

こと

いちどう

しめ

なか

しよせつ

じんじん

みようり

しちか

え、殊に一道を示す。その中の所説、甚深の妙理なり。七箇

だいじ

ろくしゆう

がくしよう

むかし

き

の大寺、六宗の学生、昔よりいまだ聞かざるところ、か

み

さんろん

ほつそう

きゆうねん

あらそ

つていまだ見ざるところなり。三論・法相の久年の諍い

かんえん

こおり

と

しょうぜん

すで

あき

渙焉として氷のごとく釈け、照然として既に明らかなる

うんむ

ひら

さんこう

み

しょうとく

ぐけ

こと、なお雲霧を披いて三光を見るがごとし。聖徳の弘化

いこう

いま

にひやくよねん

あいだ ころ

きやうろん

かず

より以降、今に二百余年の間、講ずるところの経論その数

おお

ひし

り

あらそ

うたが

と

多し。彼此、理を争えども、その疑いまだ解けず。し

さいみよう

えんしゆう

せんよう

かもこの最妙の円宗なおいまだ闡揚せず。けだしもつて、

あいだ

ぐんじよう

えんみ

かな

ふ

おも

この間の群生いまだ円味に応わざるか。伏して惟んみれ

せいちようひさ

によらい

ふ

う

ふか

じゆんえん

き

むす

ば、聖朝久しく如来の付を受け、深く純円の機を結び、

いちみよう

ぎりはじ

すなわ

こうけん

ろくしゆう

がくしやはじ

しごく

一妙の義理始めて乃ち興顕し、六宗の学者初めて至極を

さと

かい

がんれい

いま

のち

みようえん

ふね

の

悟る。この界の含霊、今より後、ことごとく妙円の船に載

はや ひがん わた う い ないしぜんぎとう ひ
り、早く彼岸に済ることを得と謂いつべし乃至善議等、牽か
れて休運に逢い、乃ち奇詞を閱す。深く期するにあらず
るよりは、何ぞ聖世に託せんや」等云々。

か かんど かじようとう いっぴやくよにん てんだいだいし
彼の漢土の嘉祥等は、一百余人をあつめて天台大師を

しようにん さだ いま にほん しちじにひやくよにん でんぎようだいし
聖人と定めたり。今、日本の七寺二百余人は、伝教大師を

しようにん 号 ほとけ めつごにせんよねん およ
聖人とごうしたてまつる。仏の滅後二千余年に及んで、

りようごく しようにんににんしゆつげん うえ てんだいだいし みぐ えんどん
両国に聖人二人出現せり。その上、天台大師末弘の円頓

だいかい えいざん こんりゆう たも ぞうほう まつ ほけきようこうせん
大戒を叡山に建立し給う。これあに像法の末に法華經広宣
るふ

流布するにあらずや。

こた い かしよう あなんとう ぐつう だいほう めみよう
答えて云わく、迦葉・阿難等の弘通せざる大法を馬鳴・

りゆうじゆ だいば てんじんとう ぐつう さき なん あらわ
竜樹・提婆・天親等の弘通せること、前の難に顕れたり。

りゆうじゆ てんじんとう る ふ のこ たま だいほう てんだいだいし ぐ
また竜樹・天親等の流布し残し給える大法を天台大師の弘

つう たも なん 顕 てんだいちしやだいいし ぐ

通し給うこと、また難にあらわれぬ。また天台智者大師の弘

つう たま えんどん だいかい でんぎようだいし こんりゆう たも

通し給わざる円頓の大戒を伝教大師の建立せさせ給うこ

けんねん

と、また顕然なり。

せん ふしん ほとけ と つ たま

ただし、詮と不審なることは、仏は説き尽くし給えども、

ほとけ めつご かしよう あなん めみよう りゆうじゆ むじやく てんじん ないしてんだい

仏の滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親、乃至天台・

でんぎよう ぐつう さいだい じんび しょうほう きようもん

伝教のいまだ弘通しましませぬ最大の深秘の正法、経文

おもて げんぜん

じんぼう

いま

まつぼう

はじ

ご

ごひやくさい

の面に現前なり。この深法、今、末法の始め五の五百歳に

いちえんぶだい こうせんる ふ

ふしんきわ

一閻浮提に広宣流布すべきやのこと、不審極まりなきなり。

と

ひほう

な

聞

つぎ

ぎ

問う。いかなる秘法ぞ。まず名をきき、次に義をきかん

思

じつじ

しゃくそん

に ど よ

しゅつげん

とおもう。このこともし実事ならば、釈尊の二度世に出現

たも

じょうぎようぼさつ

かさ

ゆじゆつ

急

し給うか、上行菩薩の重ねて涌出せるか。いそぎいそぎ

じひ

垂

か

げんじようさんぞう

ろくしよう

へ

がっし

い

慈悲をたれられよ。彼の玄奘三蔵は六生を経て月氏に入

じゅうくねん

ほっけいちじよう

ほうべんきよう

しようじようあごんきよう

しんじつきよう

つて十九年、法華一乗は方便教、小乗阿含経は真実教。

ふくうさんぞう

しんどく

かえ

じゆりようほん

あみだぶつ

書

不空三蔵は身毒に返つて寿量品を阿弥陀仏とかかれたり。

ひがし

にし

ひ

つき

誤

み

くる

これらは東を西という。日を月とあやまてり。身を苦しめ

何

こころ

そ

用

さいわ

われ

まつぼう

う

てなにかせん。心に染めてようなし。幸いに我ら末法に生

いっぽ

歩

さんぎ

超

こうべ

とら

飼

まれて、一步をあゆまずして三祇をこえ、頭を虎にかわず

むけんちようそう

得

して無見頂相をえん。

こた

い

ほうもん

もう

きようもん

そうら

答えて云わく、この法門を申さんことは、経文に候え

易

ばやすかるべし。ただし、この法門にはまず三つの大事あ

たいかい

ひろ

しがい

留

だいち

あつ

り。大海は広けれども死骸をとどめず。大地は厚けれども

ふこう

もの

の

ぶつぼう

ごぎやく

助

ふこう

救

不孝の者をば載せず。仏法には五逆をたすけ不孝をばすく

ひぼういつせんたい

もの

じかい

たいち

許

う。ただし、誹謗一闡提の者、持戒にして大智なるをばゆる

されず。

みつ

禍

この三つのわざわいとは、いわゆる念仏宗と禪宗と

しんこんしゅう

真言宗となり。

いち

ねんぶつしゅう

にほんこく

じゅうまん

ししゅ

くち

遊

一には、念仏宗は日本国に充満して四衆の口あそびと

に

ぜんしゅう

さんねいっぱつ

だいまん

びく

しかい

じゅうまん

す。二に、禪宗は三衣一鉢の大慢の比丘の四海に充満し

いってん

みようどう

思

さん

しんこんしゅう

かれ

にしゅう

て一天の明導とおもえり。三に、真言宗はまた彼らの二宗

似

えいざん

とうじ

しちじ

おんじょう

にはにるべくもなし。叡山・東寺・七寺・園城、あるいは

かんず

おむろ

ちょうり

けんぎょう

官主、あるいは御室、あるいは長吏、あるいは検校なり。

ないしどころ

しんきようじんかい

だいにちによらい

ほういん

かの内侍所の神鏡燼灰となししかども大日如来の宝印を

ぶつきよう

侍

ほうけんたいかい

い

ごだいそん

こく

仏鏡とたのみ、宝剣大海に入りしかども五大尊をもつて国

てき

き

おも

けんご

こころ

こうしやく

敵を切らんと思えり。これらの堅固の心は、たとい劫石は

磷

傾

見

だいち

はんぷく

ひすらぐとも、かたぶくべしとはみえず。大地は反覆すと

ぎしん起

か

てんだいだいし

なんぼく

責

たま

とき

も、疑心おこりがたし。彼の天台大師の南北をせめ給いし時

しゅう

渡

でんぎようだいし

ろくしゅう

も、この宗いまだわたらず。この伝教大師の六宗を

虐

たま

とき

漏

こうてき

免

しえたげ給いし時ももれぬ。かたがたの強敵をまぬかれて、

だいほう

掠

うしな

うえ

でんぎようだいし

みでし

かえって大法をかすめ失う。その上、伝教大師の御弟子・

じかくだいし

しゅう

取

立

えいざん

てんだいしゅう

掠

落

慈覚大師、この宗をとりたてて、叡山の天台宗をかすめお

いっこうしんごんしゅう

ひと

たれ

ひと

かたき

として一向真言宗になししかば、この人には誰の人か敵

びやつけん

便

こうぼうだいし

じやぎ

をなすべき。かかる僻見のたよりをえて、弘法大師の邪義

答　ひと

あんねんかしよう

こうぼう　なん

をもとがむる人もなし。安然和尚すこし弘法を難ぜんとせ

けこんしゅう

答

似

しかども、ただ華嚴宗のところばかりとがむるににて、か

ほけきよう

だいにちきよう

たい

しず

果

せけん

えつて法華経をば大日経に對して沈めはてぬ。ただ世間の

立　い　もの

たて入りの者のごとし。

と　い　さんしゅう　みようご

問うて云わく、この三宗の謬誤、いかん。

こた　い　じようどしゅう　せい　よ　どんらんほつし　もう　もの

答えて云わく、浄土宗は齊の世に曇鸞法師と申す者あり。

もと　さんろんしゅう　ひと　りゅうじゅぼさつ　じゅうじゅうびばしやろん　み

本は三論宗の人。竜樹菩薩の十住毘婆沙論を見て、

なんぎようどう　いぎようどう　た　どうしやくぜんじ　もの　とう

難行道・易行道を立てたり。道綽禪師という者あり。唐の

よ　もの　もと　ねはんぎよう　講　どんらんほつし　じようど　移

世の者。本は涅槃経をこうじけるが、曇鸞法師が浄土にうつ

ふで み

ねはんぎよう

捨

じようど

しようどう

じようど

る筆を見て、涅槃經をすてて浄土にうつつて、聖道・浄土

にほん た

どうしやく

でし

ぜんどう

もの

の二門を立てたり。また道綽が弟子、善導という者あり。

ぞうぎよう しようぎよう た

雑行・正行を立つ。

にほんこく

まつぼう

い

にひやくよねん

ごとばいん

ぎよう

ほうねん

日本国に、末法に入つて二百余年、後鳥羽院の御宇に法然

者

いっさい

どうぞく

勸

い

ぶつぼう

じき

というものあり。一切の道俗をすすめて云わく「仏法は時機

ほん

ほけきよう

だいにちきよう

てんだい

しんごんとう

はつしゅう

くしゅう

を本とす。法華經・大日經、天台・真言等の八宗・九宗、

いちだい

だいしよう

けんみつ

ごんじつとう

きようしゅうとう

じようこん

じようち

一代の大小・顕密・権実等の經宗等は、上根・上智の

しようぞうにせんねん

き

まつぼう

い

く

正像二千年の機のためなり。末法に入つては、いかに功を

ぎよう

やく

うえ

みだねんぶつ

なして行ずるともその益あるべからず。その上、弥陀念仏

雑

ぎよう

ねんぶつ

おうじよう

にまじえて行ずるならば、念仏も往生すべからず。これ、

もう

りゆうじゆぼさつ

どんらんほっし

わたくしに申すにはあらず。

竜樹菩薩・曇鸞法師は

なんぎようどう

名

どうしやく

いちにん

う

ものあ

『難行道』となづけ、道綽は『いまだ一人も得る者有ら

嫌

ぜんどう

せん

なか

ひと

な

ず』ときらい、善導は『千の中に一りも無し』となづけた

たしゆう

ごふしん

えしん

せんとく

過

り。これらは他宗なれば御不審もあるべし。恵心の先徳にす

たま

てんだい

しんごん

ちしや

まつだい

ぎさせ給える天台・真言の智者は、末代におわすべきか。

おうじようしゆう

書

けんみつ

きようほう

よ

ししやう

かれ往生要集にかかれたり。『顕密の教法は予が死生を

離

ほう

さんろん

ようかん

じゆういんとう

はなるべき法にはあらず』と。また三論の永観が十因等を

ほっけ

しんごんとう

捨

いっこう

ねんぶつ

じゆう

みよ。されば、法華・真言等をすてて一向に念仏せば『十

すなわ　じゅうしょう　ひやく　すなわ　ひやくしょう

勸

は即ち十生じ、百は即ち百生ず』なり」とすすめけ

えいざん　とうじ　おんじよう　しちじとう　はじ　じようろん

れば、叡山・東寺・園城・七寺等、始めは諍論するよう

おうじようようしゆう　じよ　ことば　どうり

なれども、往生要集の序の詞、道理かとみえければ、顕

しんざ　すお　たま　ほうねん　でし

真座主落ちさせ給いて法然が弟子となる。

うえ　ほうねん　でし　ひとびと

その上、たとい法然が弟子とならぬ人々も、弥陀念仏は

たぶつ　似　くち　こころ　寄　思

他仏ににるべくもなく口ずさみとし、心よせにおもいけれ

にほんこくみないちどう　ほうねんぼう　でし　み　ごじゆうねん

ば、日本国皆一同に法然房の弟子と見えけり。この五十年が

あいだ　いつてんしかい　いちにん　ほうねん　でし　ほうねん　でし

間、一天四海、一人もなく法然が弟子となる。法然が弟子

にほんこくいちにん　ほうぼう　もの　たと

となりぬれば、日本国一人もなく謗法の者となりぬ。譬え

せんにん

こ

いちどう

いちにん

おや

さつがい

せんにんとも

ごぎやく

ば、千人の子が一同に一人の親を殺害せば、千人共に五逆の

もの

いちにんあび

お

よにんお

けつく

者なり。一人阿鼻に堕ちなば、余人堕ちざるべしや。結句は、

ほうねん

るざい

怨

あくりよう

われ

でしとう

法然、流罪をあだみて悪霊となつて、我ならびに弟子等を

科

こくしゆ

さんじ

そうとう

み

い

むほん

とがせし国主・山寺の僧等が身に入つて、あるいは謀反を

あくじ

みな

かんとう

滅

おこし、あるいは悪事をなして、皆、関東にほろぼされぬ。

残

えいざん

とうじとう

しよそう

ぞくなん

ぞくによ

わずかにのこれる叡山・東寺等の諸僧は、俗男・俗女に

侮

えんこう

ひと

笑

ふしゆ

どうじ

べつじよ

あなずらること、猿猴の人にわらわれ、俘囚が童子に蔑如

せらるるがごとし。

ぜんしゆう

たよ

え

じさいとう

ひと

まなこ

禅宗は、またこの便りを得て持斎等となつて人の眼を

まよ

尊

けしき

僻

法

門

迷わかし、たつとげなる気色なれば、いかにひがほうもんを

言

狂

とが

覺

ぜんしゅう

もう

しゅう

きょうげ

いいくるえども失ともおぼえず。「禪宗と申す宗は『教外

べつでん

もう

しやくそん

いつさいきよう

ほか

かしようそんじや

密

に別伝す』と申して、釈尊の一切経の外に迦葉尊者にひそ

囁

たま

ぜんしゅう

いつさいきよう

かにささやかせ給えり。されば、禪宗をしらずして一切経

なら

いぬ

いかずち

囁

さる

つき

かげ

取

を習うものは、犬の雷をかむがごとし。猿の月の影をとる

似

うんぬん

ゆえ

にほんこく

なか

ふこう

ふぼ

ににたり」云々。この故に、日本国の中に不孝にして父母に

捨

ぶれい

ゆえ

しゆくん

勘

当

すてられ、無礼なる故に主君にかんどうせられ、あるいは

じゃく

ほつしとう

がくもん

嬾

ゆうじよ

物

狂

若なる法師等の学文にもものうき、遊女のものぐるわしき

ほんしよう

かな

じゃほう

みないちどう

じさい

くに

本性に叶える邪法なるゆえに、皆一同に持斎になりて国の

ひやくせい 食

こうちゆう

てん てんげん 怒

百姓をくらう蝗虫となれり。しかれば、天は天眼をいから

ちじん み 震

かし、地神は身をふるう。

しんこんしゆう もう

かみ ふた

禍

似

真言宗と申すは、上の二つのわざわいにはにるべくもな

だいびやつけん

粗々

もう

だいとう

き大僻見なり。あらあらこれを申すべし。いわゆる大唐の

げんそうこうてい

ぎよう

ぜんむいさんぞう

こんごうちさんぞう

ふくうさんぞう

玄宗皇帝の御宇に、善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、

だいにちきよう

こんごうちようきよう

そしつじきよう

がっし

渡

大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支よりわたす。この

さんきよう

せつそうふんみよう

ごくり

たず

えにはに

三経の説相分明なり。その極理を尋ぬれば会二破二の

いちじよう

そう

ろん

いん

しんこん

一乗、その相を論ずれば印と真言とばかりなり。なお

けごん はんにや

さんいちそうたい

いちじよう

およ

てんだいしゆう

にぜん

華嚴・般若の三一相對の一乗にも及ばず、天台宗の爾前の

べつ えんほど

ぞう つうにきよう おもて

ぜんむい

別・円程もなし。ただ蔵・通二教を面とす。しかるを、善無畏

さんぞう

きようもん あらわ 言 い

三蔵おもわく「この経文を頭にい出だすほどならば、

けごん

ほつそう

痴

てんだいしゅう

笑

だいじ

華嚴・法相にもおこづかれ、天台宗にもわらわれなん。大事

がつし

たも きた

黙

ほい

として月支よりは持ち来りぬ。さてもだせば本意にあらず」

思

てんだいしゅう

なか

いちぎようぜんじ

びやくにんいちにん

とやおもいけん。天台宗の中に一行禪師という僻人一人

語

かんど

ほうもん

あり。これをかたらいて、漢土の法門をかたらせけり。

いちぎようあじやり打

抜

さんろん

ほつそう

けごんとう

粗

々

一行阿闍梨うちぬかれて、三論・法相・華嚴等をあらあら

語

てんだいしゅう

た

様

もう

かたるのみならず、天台宗の立てられけるようを申しけれ

ぜんむい 思

てんだいしゅう

てんじく

き

ば、善無畏おもわく、天台宗は天竺にして聞きしにもなお

打勝

嵩

様

ぜんむい

うちすぐれて、かさむべきようもなかりければ、善無畏、

いちぎよう

打抜

い

そう かんど

小賢

もの

一行をうちぬいて云わく「わ僧は漢土にはこざかしき者に

てんだいしゆう

しんみよう

しゆう

いま

しんごんしゆう

てありけり。天台宗は神妙の宗なり。今、真言宗の

てんだいしゆう

嵩

いん

しんごん

天台宗にかさむところは、印と真言とばかりなり」といい

いちぎよう

思

ぜんむいさんぞう

いちぎよう

ければ、一行さもやとおもいければ、善無畏三蔵、一行に

語

い

てんだいだいし

ほけきよう

しよ

造

たま

かたつて云わく「天台大師の法華經に疏をつくらせ給える

だいにちきよう

しよ

つく

しんごん

ぐつう

思

なんじ

ごとく、大日經の疏を造つて真言を弘通せんとおもう。汝

書

いちぎよう

い

易

そうろう

かきなんや」といいければ、一行が云わく「やすう候。

書

そうろう

てんだいしゆう

憎

しゆう

ただし、いかようにかき候べきぞ。天台宗はにくき宗な

しよしゆう

われ

われ

争

いっさい

かな

り。諸宗は我も我もとあらそいをなせども、一切に叶わざ

ひと

ほけきよう

じよぶん

むりようぎきよう

もう

ること一つあり。いわゆる法華經の序分に無量義經と申す

きよう

さきしじゆうよねん

きようぎよう

もん

う

塞

經をもつて前四十余年の經々をばその門を打ちふさぎ

そうら

ほけきよう

ほっしほん

じんりきほん

のち

きようぎよう

候いぬ。法華經の法師品・神力品をもつて後の經々をば

防

かた

並

きようぎよう

こんせつ

もん

またふせがせぬ。肩をならぶ經々をば今説の文をもつて

責

そうろう

だいにちきよう

さんせつ

なか

置

そうろう

せめ候。大日經をば三説の中にはいずくにかおき候べ

と

とき

ぜんむいさんぞう

おお

たく

い

き」と問いければ、その時に善無畏三蔵、大いに巧んで云わ

だいにちきよう

じゆうしんぼん

ほん

むりようぎきよう

しじゆうよねん

く「大日經に住心品という品あり。無量義經の四十余年の

きようぎよう

う

払

だいにちきよう

にゆうまんだら いげ

經々を打ちはらうがごとし。大日經の入曼陀羅已下の

しよほん

かんど

ほけきよう

だいにちきよう

にほん

てんじく

諸品は、漢土にては法華經・大日經とて二本なれども、天竺

いつきよう

しやかぶつ

しやりほつ

みろく

む

にては一經のごとし。釈迦仏は舍利弗・弥勒に向かつて

だいにちきよう

ほけきよう

名

いん

しんごん

捨

り

大日經を法華經となづけて印と真言とをすててただ理ば

説

らじゆうさんぞう

渡

てんだいだいし

み

かりをとけるを、羅什三蔵これをわたす。天台大師これを見

だいにちによらい

ほけきよう

だいにちきよう

こんごうさつた

む

る。大日如来は法華經を大日經となづけて金剛薩埵に向か

説

たも

だいにちきよう

われ

つてとかせ給う。これを大日經となづく。我、まのあたり

てんじく

み

なんじ

書

様

天竺にしてこれを見る。されば、汝がかくべきようは、

だいにちきよう

ほけきよう

みず

にゆう

いちみ

大日經と法華經とをば水と乳とのように一味となすべし。

だいにちきよう

いこんとう

さんせつ

みなほけきよう

もししからば、大日經は已今当の三説をば皆法華經のごと

打落

くうちおとすべし。さて印と真言とは、心法の一念三千に

しようこん

さんみつそうおう

ひほう

さんみつそうおう

莊嚴するならば、三密相應の秘法なるべし。三密相應する

てんだいしゅう

いみつ

しんごん

こう

しようぐん

かぶと

ほどならば、天台宗は意密なり。真言は甲なる將軍の甲

よろい

たい

ゆみや

よこ

だいとう

こし

佩

鎧を帶して弓箭を横たえ、大刀を腰にはけるがごとし。

てんだいしゅう

いみつ

こう

しようぐん

あかはだか

天台宗は意密ばかりなれば、甲なる將軍の赤裸なるがご

いちぎようあじやり

書

とくならん」といいければ、一行阿闍梨はこのようにかき

けり。

かんどさんびやくろくじつかこく

漢土三百六十箇国には、このことを知る人なかりけるか

はじ

しようれつ

じようろん

し

ひと

ぜんむいとう

ひと

のあいだ、始めには勝劣を諍論しけれども、善無畏等は人

おも

てんだいしゅう

ひとびと

かる

てんだいだいし

がら重し、天台宗の人々は軽かりけり。また天台大師ほど

ち

もの

ひび

しんごんしゅう

の智ある者もなかりければ、ただ日々に真言宗になりてさ

止

とし 久

しんごん

おうわく

ね

てやみにけり。年ひさしくなれば、いよいよ真言の誑惑の根、

深

隠

そうら

ふかくかくれて候いけり。

にほんこく

でんぎようだいし

かんど

渡

てんだいしゅう

渡

たま

日本国の伝教大師、漢土にわたりて天台宗をわたし給

しんごんしゅう

並

渡

てんだいしゅう

にほん

いしついでに、真言宗をならべわたす。天台宗を日本の

こうてい

授

しんごんしゅう

ろくしゅう

だいとく

習

たも

皇帝にさづけ、真言宗を六宗の大徳にならわせ給う。た

ろくしゅう

てんだいしゅう

しやうれつ

につとういぜん

さだ

たも

だし、六宗と天台宗の勝劣は、入唐已前に定めさせ給う。

につとういご

えんどん

かいじよう

た

た

ろん

はか

入唐已後には円頓の戒場を立ちよう立てじの論が計りな

かたきおお

かいじよう

いちじじよう

かりけるかのあいだ、敵多くしては戒場の一事成じがた

思

まっぼう

責

思

しとやおぼしめしけん、また末法にせめさせんとやおぼし

こうてい

おんまえ

ろん

たま

でしとう

けん、皇帝の御前にしても論ぜさせ給わず。弟子等にもは

語

たま

えびようしゅう

もう

いっかん

かばかしくかたらせ給わず。ただし、依憑集と申す一卷の

ひしよ

しちしゅう

ひとびと

てんだい

お

様

書

秘書あり。七宗の人々の天台に落ちたるようをかかれて

そうろうふみ

ふみ

じよ

しんごんしゅう

おうわくいっぴつ見

そうろう

候文なり。かの文の序に真言宗の誑惑一筆みえて候。

こうぼうだいし

おな

えんりやくねんちゅう

ごにつとう

せいりゅうじ

けいか

弘法大師は、同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に

あ

たま

しんごんしゅう

習

たま

ごきちよう

のち

いちだい

値い給いて真言宗をならわせ給えり。御帰朝の後、一代の

しょうれつ

はん

たま

だいいちしんごん

だいにけごん

だいさんほつけ

勝劣を判じ給いけるには「第一真言、第二華嚴、第三法華」

書

そうろう

だいし

せけん

ひとびと

とかかれて候。この大師は、世間の人々はもつてのほか

おも

ひと

ぶつぼう

もう

恐

に重んずる人なり。ただし、仏法のこととは、申すにおそれ

あれども、もつてのほかにあらきことどもはんべり。

粗々

勘

かんど

渡

たま

このことをあらあらかんがえたるに、漢土にわたらせ給

しんごん

じそう

いん

しんごん

なら

伝

いては、ただ真言の事相の印・真言ばかり習いつたえて、

ぎり

詳

捌

たま

その義理をばくわしくもさばくらせ給わざりけるほどに、

にほん

のち

おお

せけん

み

てんだいしゅう

日本にわたりて後、大いに世間を見れば、天台宗もつての

嵩

わ

おも

しんごんしゅう

弘

ほかにかさみたりければ、我が重んずる真言宗ひろめがた

もと

にほんこく

なら

けごんしゅう

かりけるかのゆえに、本、日本国にして習いたりし華嚴宗を

取 出 ほけきよう 勝 由 もう つね

とりいだして、法華經にまされるよしを申しけり。それも常

けごんしゅう もう ひとしん 思

の華嚴宗に申すように申すならば人信ずまじとやおぼしめ

少 色 変 だいにちきよう りゆうみようぼさつ

しけん、すこしいろをかえて「これは、大日經、竜猛菩薩

ぼだいしんろん ぜんむいとう じつぎ だいもうご 引 添

の菩提心論、善無畏等の実義なり」と大妄語をひきそえた

てんだいしゅう ひとびと 甚 咎 もう

りけれども、天台宗の人々いとうとがめ申すことなし。

と い こうぼうだいし じゅうじゅうしんろん ひぞうほうやく にきようろん

問うて云わく、弘法大師の十住心論・秘藏宝鑰・二教論

い じようじよう じじよう な う のち

に云わく「かくのごとき乗々は、自乗に名を得れども、後

のぞ けろん な い むみよう へんいき みよう

に望めば戲論と作る」。また云わく「無明の辺域にして明の

ぶん い だいしじゆくそみ い

分位にあらず」。また云わく「第四熟蘇味なり」。また云わ

く「震旦の人師等、諍つて醍醐を盗んで各自宗に名づく」

とううんぬん

しやく へんころ

等云々。これらの釈の心いかん。

こた

い

よ

しやく

驚

いつさいきよう

答えて云わく、予この釈におどろいて一切経ならびに

だいにち

さんぶきようとう

けごんぎよう

だいにちきよう

たい

大日の三部経等をひらきみるに、華嚴経と大日経とに対す

ほけきよう

けろん

ろくはらみつきよう

たい

ぬすびと

しゆごきよう

たい

れば法華経は戯論、六波羅蜜経に対すれば盗人、守護経に対

むみよう

へんいき

もう

きようもん

いちじいつく

そうら

すれば無明の辺域と申す経文は、一字一句も候わず。こ

果 無

さん

しひやくよねん

のことは、いとはかなきことなれども、この三、四百余年に

にほんこく

ちしや

もち

たま

さだ

日本国のそこばくの智者どもの用いさせ給えば、定めて

故

思

易

僻

ごと

ゆえあるかとおもいぬべし。しばらくいとやすきひが事を

挙 よじ

ばあげて、余事のはかなきことをしらすべし。

知

ほけきよう だいごみ しよう

法華經を醍醐味と称することは、陳・隋の代なり。

ちん ずい よ

ろくはらみつきよう

とう

なか

はんにや さんぞう

渡

六波羅蜜經は唐の半ばに般若三藏これをわたす。

ろくはらみつきよう

だいご

ちん

ずい

よ

渡

六波羅蜜經の醍醐は陳・隋の世にはわたりてあらばこそ

てんだいだいし

しんごん

だいご

ぬす

たま

ぼうれい

にほん

天台大師は真言の醍醐をば盗ませ給わめ。傍例あり。日本の

とくい

い

てんだいだいし

じんみつきよう

さんじきよう

破

さんずん

得一が云わく「天台大師は深密經の三時教をやぶる。三寸

した

ごしやく

み

断

旬

でんぎよう

の舌をもつて五尺の身をたつべし」とののしりしを、伝教

だいし

糾

い

じんみつきよう

とう

はじ

げんじよう

大師これをただして云わく「深密經は唐の始め玄奘これ

渡

てんだい

ちん

ずい

ひと

ちしやごにゆうめつ

のちすうかねん

をわたす。天台は陳・隋の人、智者御入滅の後数箇年あつ

じんみつきよう

し いご

きよう

て深密経わたれり、死して已後にわたれる経をば、いか

やぶ たも

責

たま

そうら

とくいつ

でか破り給うべき」とせめさせ給いて候いしかば、得一は

詰

したやつ

裂

し

そうら

つまるのみならず、舌八つにさけて死し候いぬ。

かれ

似

あつく

けごん

ほうぞう

さんろん

これは彼にはにるべくもなき悪口なり。華嚴の法蔵、三論

かじよう

ほつそう

げんじよう

てんだいとう

ないしなんぼく

しよし

ごかん

の嘉祥、法相の玄奘、天台等、乃至南北の諸師、後漢より

いげ

さんぞう

にんし

みな押

ぬすびと

書

そうろう

已下の三蔵・人師を皆おさえて、盗人とかかれて候なり。

うえ

ほけきよう

だいご

しよう

てんだいとう

わたくし

その上、また法華経を醍醐と称することは、天台等の私

ことば

ほとけ

ねはんぎよう

ほけきよう

だいご

説

たま

の言にはあらず。仏、涅槃経に法華経を醍醐ととかせ給い、

てんじんぼさつ

ほけきよう

ねはんぎよう

だいご

書

そうろう

りゆうじゆ

天親菩薩は法華経・涅槃経を醍醐とかかれて候。竜樹

ぼさつ ほけきよう みようやく 名

たも

ほけきようとう

菩薩は法華経を妙薬となづけさせ給う。されば、法華経等

だいご もうひとぬすびと

しゃか たほう じつぼう しょぶつ

を醍醐と申す人盗人ならば、釈迦・多宝・十方の諸仏・

りゆうじゆ てんじんとう ぬすびと

竜樹・天親等は盗人にておわすべきか。

こうぼう もんにんとう ないしにほん とうじ しんごんし

じげん

弘法の門人等、乃至日本の東寺の真言師、いかん。自眼の

こくびやく 拙

わきま

た かがみ

じか

黒白はつたなくして弁えずとも、他の鏡をもつて自禍を

知 ほか ほけきよう けろん ほう 書

だいにちきよう

しれ。この外、法華経を戯論の法とかかるること、大日経・

こんごうちようきようとう 確

きようもん

出

かれがれ

金剛頂経等にたしかなる经文をいだされよ。たとい彼々

きようぎよう ほけきよう けろん 説

やくしや あやま

の経々に法華経を戯論ととかれたりとも、訳者の誤るこ

しりよ

こうし

ともあるぞかし。よくよく思慮のあるべかりけるか。孔子は

くしいちげん

しゅうこうたん

ゆあみ

み

握

しよく

み

九思一言、周公旦は沐には三たびにぎり、食には三たび

吐

げしよ

せけん

あさ

こと

なら

ひと

はかれけり。外書のはかなき世間の浅き事を習う人すら、

ちじん

そうろう

浅

智人はこう候ぞかし。いかにかかるあさましきことはあ

りけるやらん。

びやつけん

すえ

か

でんぼういん

ほんがん

号

かかる僻見の末なれば、彼の伝法院の本願とごうする

しようがくぼう

しやりこう

しき

い

すうこう

ふ

じまかえん

正覚房が舍利講の式に云わく「尊高なるものは不二摩訶衍

ほとけ

ろご

さんじん

くるま

たす

あた

ひおう

の仏なり。驢牛の三身は車を扶くること能わず。秘奥な

りようぶまんだら

おし

けんじよう

しほう

はきもの

と

るものは両部曼陀羅の教えなり。顕乗の四法は履を採る

た

うんぬん

けんじよう

しほう

もう

ほっそう

さんろん

に堪えず」と云々。「顕乗の四法」と申すは法相・三論・

けごん ほつけ しにん ろご さんじん もう ほつけ けごん はんにや
華嚴・法華の四人、「驢牛の三身」と申すは法華・華嚴・般若・

じんみつきよう きようしゆ しぶつ ぶつそう しんごんし たい

深密經の教主の四仏、これらの仏僧は、真言師に対すれ

しようかく こうぼう うしか はきものしゆしや 足

ば正覺・弘法の牛飼い・履物取者にもたらぬほどのことな

書 そうつろう

りとかいて候。

か がつし だいまんばらもん しょうち はくかく けんみつにどうむね 浮

彼の月氏の大慢婆羅門は生知の博学。頭密二道胸にうか

ないげ てんせきたなごころ 握 おうしんこうべ 傾

べ、内外の典籍 掌 ににぎる。されば、王臣頭をかたぶけ、

ばんみんしはん あお まんしん せけん そんすう

万民師範と仰ぐ。あまりの慢心に「世間に尊崇するものは

だいじぎいてん ばすてん ならえんてん だいかくせそん ししやう

大自在天・婆藪天・那羅延天・大覺世尊、この四聖なり。我

ざ しそく ざ あし 作 ざ ほうもん もう

が座の四足にせん」と、座の足につくりて坐して法門を申し

とうじ しんごんし しゃかぶつとう いっさい ほとけ

けり。当時の真言師が釈迦仏等の一切の仏をかきあつめて、

かんじよう とき しき 曼 荼 羅 ぜんしゅう ほつしとう

灌頂する時、敷まんだらとするがごとし。禪宗の法師等が

い しゅう ほとけ いただき 踏 だいほう

云わく「この宗は仏の頂をふむ大法なり」というがご

けんあいろんじ もう しょうそう かれ 糾

とし。しかるを、賢愛論師と申せし小僧あり。彼をただす

由 もう おうしんばんみん 用

べきよし申せしかども、王臣万民これをもちいず。結句は

だいまん でしとう だんなとう もう むりよう もうご

大慢が弟子等・檀那等に申しつけて、無量の妄語をかまえ

あつく ちようちやく いのち 惜 訕

て悪口・打擲せしかども、すこしも命もおしまずのし

ていおう けんあい 憎 詰 たま

りしかば、帝王、賢愛をにくみてつめさせんとし給いしほ

だいまん 責 だいおう てん あお

どに、かえりて大慢がせめられたりしかば、大王、天に仰ぎ

地に伏してなげいてのたまわく「朕は、まのあたりこのこ

聞

じゃけん

晴

せんおう

もの

証

とをきいて邪見をはらしぬ。先王は、いかにこの者にたぼら

あびじごく

けんあいろんじ

みあし

かされて阿鼻地獄におわすらん」と、賢愛論師の御足にと

ひるい

たま

けんあい

おんはか

りつきて悲涙せさせ給いしかば、賢愛の御計らいとして

だいまん

ろ

乗

ごじく

おもて

晒

たま

大慢を驢にのせて五竺に面をさらし給いければ、いよいよ

あくしんさか

げんしん

むけんじごく

お

いま

よ

しんごん

悪心盛んになりて現身に無間地獄に堕ちぬ。今の世の真言

ぜんしゅうとう

変

と禅宗等とはこれにかわれりや。

かんど

さんがいぜんじい

きようしゆしやくそん

ほけきよう

だいいち

だいに

漢土の三階禅師云く「教主釈尊の法華経は第一・第二

かい

しようぞう

ほうもん

まつだい

わ

ふきよう

階の正像の法門なり。末代のためには我がつくれる普経な

ほけきよう いま よ ぎよう もの じつぽう だいあびごく お

り。法華経を今の世に行ぜん者は十方の大阿鼻獄に墮つべ

まっぽう こんき 当 もう ろくじ

し。末法の根機にあたらざるゆえなり」と申して、六時の

らいさん しじ ざぜん しょうじん ほとけ ひととお

礼懺、四時の坐禅、生身の仏のごとくなりしかば、人多く

たつと でしまんよにん しょうによ ほけきよう

尊んで弟子万余人ありしかども、わずかの小女の法華経

読 責 とうぎ こえ うしな のち だいじや

をよみしにせめられて、当坐には音を失い、後には大蛇に

だんな でし しょうによ しょうによとう 呑

なりて、そこばくの檀那・弟子ならびに小女・処女等をの

く いま ぜんじん ほうねんとう せんちゆうむいち あくぎ

み食らいしなり。今の善導・法然等が千中無一の悪義もこ

そうろう

れにて候なり。

さんだいじ ひさ そうら 卑

これらの三大事はすでに久しくなり候えば、いやしむべ

きにはあらねども、申さば信ずる人もやありなん。
もう しん ひと

これよりも百千万億倍信じがたき最大の悪事はんべり。
ひやくせんまんおくばいしん さいだい あくじ

慈覚大師は伝教大師の第三の御弟子なり。しかれども、上
じかくだいし でんぎようだいし だいさん みでし かみ

一人より下万民にいたるまで、伝教大師には勝れておわし
いちにん しもばんみん でんぎようだいし すぐ

ます人なりとおもえり。この人、真言宗と法華宗の奥義を
ひと 思 ひと しんごんしゆう ほつけしゆう おうぎ

極めさせ給いて候が、「真言は法華経に勝れたり」とかか
きわ たま そうろう しんごん ほけきよう すぐ 書

せ給えり。しかるを、叡山三千人の大衆、日本一州の学者
たま えいざんさんぜんにん だいしゆ にほんいつしゆう がくしや

等、一同帰伏の宗義なり。弘法の門人等は、大師の法華経を
とう いちどうきぶく しゆうぎ こうぼう もんにんとう だいし ほけきよう

華嚴経に劣るとかかせ給えるは我がかたながらも少し強き
けごんぎよう おと 書 たま わ 方 すこ こわ

じかくだいし

しゃく

思

しんごんしゅう

ようなれども、慈覚大師の釈をもつておもうに、真言宗の

ほけきょう　すぐ

いちじょう

にほんこく

しんごんしゅう

法華経に勝れたることは一定なり。日本国にして真言宗

ほけきょう　すぐ

た

えいざん

こわ

敵

を法華経に勝ると立つるをば叡山こそ強がたきなりぬべか

じかく

さんぜんにん

くち

塞

しんごんしゅう

りつるに、慈覚をもつて三千人の口をふさぎなば、真言宗

とうじだいいち

方

人

じかくだいし

はおもうごとし。されば、東寺第一のかとうど、慈覚大師に

過

はすぐべからず。

れい

じょうどしゅう

ぜんしゅう

よこく

広

にほん

例せば、浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも、日本

こく

えんりやくじ

許

むへんこう

経

国にしては延暦寺のゆるされなからんには無辺劫はふとも

かな

あんねんかしよう

もう

えいざんだいいち

ことく

きょうじ

叶うまじかりしを、安然和尚と申す叡山第一の古徳、教時

じようろん もう ふみ くしゅう しょうれつ た だいいち

諍論と申す文に九宗の勝劣を立てられたるに、「第一

しんこんしゅう だいにぜんしゅう だいさんてんだいほつけしゅう だいしけこんしゅう とううんぬん

真言宗、第二禅宗、第三天台法華宗、第四華嚴宗」等云々。

だいまようしやく 付 ぜんしゅう にほんこく じゅうまん

この大謬釈について禅宗は日本国に充滿して、すでに

ぼうこく ほうねん ねんぶつしゅう 流行 いっこく

亡国とならんとはするなり。法然が念仏宗のはやりて一国

うしな いんねん えしん おうじようようしゅう じよ 始

を失わんとする因縁は、恵心の往生要集の序よりはじま

しし み なか むし しし ほ ほとけ しる たも

れり。「師子の身の中の虫の師子を食む」と仏の記し給う

実

はまことなるかなや。

でんぎようだいし にほんこく じゅうごねん あいだ てんだい しんこんとう

伝教大師は、日本国にして十五年が間、天台・真言等を

じけん たも しょうち みようご し 覚

自見せさせ給う。生知の妙悟にて師なくしてさとらせ給い

たま

せけん ふしん 晴

かんど わた

しかども、世間の不審をはらさんがために漢土に亘つて

てんだい しんごん にしゅう つた たま とき か ど ひとびと 様 々

天台・真言の二宗を伝え給いし時、彼の土の人々はようよう

ぎ わ こころ ほつけ しんごん 勝

の義ありしかども、我が心には法華は真言にすぐれたりと

思 しんごんしゅう しゅう みようじ けず たま

おぼしめししゆえに、真言宗の宗の名字をば削らせ給い

てんだいしゅう しかん しんごん とう書 たも じゅうにねん ねんぶん

て「天台宗の止観・真言」等かかせ給う。十二年の年分

とくどしやににん 置 たま かさ し かんいん ほけきよう

得度者二人をおかせ給い、重ねて止観院に法華経・

こんこうみようきよう にんのうきよう さんぶ ちんごこつか さんぶ さだ せんじ

金光明経・仁王経の三部を鎮護国家の三部と定めて宣旨

もう くだ えいたい にほんこく だいいち ちようほう しんじ ほうけん ないしどころ

を申し下し、永代、日本国の第一の重宝、神璽・宝剣・内侍所

崇 たま

とあがめさせ給いき。

えいざんだいいち

ざす

ぎしんかしよう

だいに

ざす

えんちようだいし

叡山第一の座主・義真和尚、第二の座主・円澄大師まで

ぎそうい

だいさん

じかくだいしごにつとう

かんど

渡

はこの義相違なし。第三の慈覚大師御入唐。漢土にわたり

じゆうねん

あいだ

けんみつにどう

しやうれつ

はちか

だいとく

習

伝

て十年が間、顕密二道の勝劣を八箇の大徳にならいつた

てんだいしゆう

ひとびと

こうしゆ

ゆいけんとう

習

たま

う。また天台宗の人々、広修・維蠲等にならわせ給いしか

こころ

うち

思

しんごんしゆう

てんだいしゆう

すぐ

ども、心の内におぼしけるは「真言宗は天台宗には勝れ

わし

でんぎようだいし

詳

たりけり。我が師・伝教大師は、いまだこのことをばくわ

なら

たま

かんど

ひさ

渡

たま

しく習わせ給わざりけり。漢土に久しくもわたらせ給わざ

ゆえ

ほうもん

粗打

見

思

りける故に、この法門はあらうちにみおわしけるや」とおぼ

にほんこく

きちよう

えいざんとうとう

しかんいん

にし

そうじいん

もう

して、日本国に帰朝し叡山東塔の止観院の西に総持院と申

だいこうどう

た

ごほんぞん

こんごうかい

だいにちによらい

みまえ

す大講堂を立て、御本尊は金剛界の大日如来、この御前に

だいにちきよう

ぜんむい

しよ

もと

こんごうちようきよう

しよしちかん

して大日経の善無畏の疏を本として、金剛頂経の疏七卷、

そしつじきよう

しよしちかん

いじようじゆうしかん

造

蘇悉地経の疏七卷、已上十四卷をつくる。

しよ

かんじん

しやく

い

きよう

にしゆあ

いち

けんじきよう

この疏の肝心の釈に云わく「教に二種有り。一は顕示教。

い

さんじようきよう

せぞく

しようぎ

えんゆう

ゆえ

謂わく三乗教なり。世俗と勝義といまだ円融せざるが故

に

ひみつきよう

い

いちじようきよう

せぞく

しようぎ

いつたい

に。二は秘密教。謂わく一乗教なり。世俗と勝義と一体に

ゆう

ゆえ

ひみつきよう

なか

にしゆあ

いち

り

して融ずるが故に。秘密教の中にまた二種有り。一には理

ひみつ

きよう

い

けごん

はんにや

ゆいま

ほつけ

ねはんとう

秘密の教。謂わく華嚴・般若・維摩・法華・涅槃等なり。

せぞく

しようぎ

ふに

と

しんごん

ただ世俗と勝義との不二を説くのみにして、いまだ真言・

みつゐん じと ゆえ に じりくみつ きよう い
密印の事を説かざるが故に。二には事理俱密の教。謂わく

だいにちきよう こんごうちようきよう そしつじきようとう せぞく しやうぎ

大日経・金剛頂経・蘇悉地経等なり。また世俗と勝義と

ふに と しんごん みつゐん じ と ゆえ とううんぬん

の不二を説き、また真言・密印の事を説くが故に」等云々。

しやく こころ ほけきよう しんごん さんぶ しやうれつ さだ たも

釈の心は、法華経と真言の三部との勝劣を定めさせ給う

しんごん さんぶきよう ほけきよう しよせん り おな いちねん

に、「真言の三部経と法華経とは、所詮の理は同じく一念

さんぜん ほうもん みつゐん しんごんとう じほう

三千の法門なり。しかれども、密印と真言等の事法は、

ほけきよう 欠 在 ほけきよう りひみつ しんごん さんぶきよう

法華経にはかけておわせず。法華経は理秘密、真言の三部経

じりくみつ てんちうんदै 書

は事理俱密なれば、天地雲泥なり」とかかれたり。しかも、

ふで わたくし しやく ぜんむいさんぞう だいにちきよう

「この筆は私の釈にはあらず、善無畏三蔵の大日経の

しよ ころ

思

にしゅう

しやうれつふしん

疏の心なり」とおぼせども、なおなお二宗の勝劣不審に

たにん うたが

散

やありけん、はたまた他人の疑いをさんぜんとやおぼしけ

だいし じかく

でん い

だいし にきよう しよ つく

ん、大師〈慈覚なり〉の伝に云わく「大師、二経の疏を造り、

く な

ちゅうしん ひと おも

しよ ぶつ い

功を成しおわつて、中心に独り謂えらく『この疏、仏意に

つう いな

ぶつ い つう

よ るでん

通ずるや否や。もし仏意に通ぜずんば、世に流伝せじ』。よ

ぶつぞう みまえ

あんち

しちにちしちや

ぎようき

じんじよう

つて仏像の前に安置し、七日七夜、翹企すること深誠に

ごんじゆ

きしよう

いつか

ごこう

いた

ゆめ

しやうご

して、勤修して祈請す。五日の五更に至つて夢みらく、正午

あ

にちりん

あお

み

ゆみ

い

や

に当たつて日輪を仰ぎ見て、弓をもつてこれを射る。その箭、

にちりん

あ

にちりんすなわ

てんどう

ゆめさ

のち

ふか

さと

日輪に当たつて、日輪即ち転動す。夢覚めての後、深く悟

る。『仏意に通達せり。後世に伝うべし』と」等云々。
ぶつ い つうだつ こうせい つた どううんぬん

慈覚大師は、本朝にしては伝教・弘法の両家を習いきわ
じ かくだい いし ほんちよう でんぎよう こうぼう りようけ なら 極

め、異朝にしては八大徳ならびに南天の宝月三蔵等に十年
いちよう はちだいとく なんてん ほうがつさんぞうとう じゅうねん

が間最大事の秘法をきわめさせ給える上、二経の疏をつく
あいだいだいじ ひほう たま うえ にきよう しよ 造

り了わんぬ。重ねて本尊に祈請をなすに、智慧の矢すでに
お かさ ほんぞん きしよう ちえ や

中道の日輪にあたりてうちおどろかせ給い、歡喜のあまり
ちゅうどう にちりん 当 打 驚 たま かんき

に仁明天皇に宣旨を申しそえさせ給い、天台座主を真言の
にんみようてんのう せんじ もう 添 たま てんだいざす しんごん

官主となし、真言の鎮護国家の三部とて、今に四百余年が
かんず しんごん ちんごこつか さんぶ いま しひやくよねん

間、碩学稻麻のごとし。渴仰竹葦に同じ。されば、桓武・
あいだ せきがくとうま かつごうちくい おな かんむ

でんぎようとう　にほんこくこんりゆう　じとう　いちう　しんごん　てら

伝教等の日本国建立の寺塔は、一字もなく真言の寺とな

くげ　ぶけ　いちどう　しんごんし　め　ししよう　仰　かん

りぬ。公家も武家も一同に真言師を召して師匠とあおぎ、官

てら　預　給　ぶつじ　もくえ　かいげんくよう　はつしゆう

をなし、寺をあずけたぶ。仏事の木画の開眼供養は、八宗

いちどう　だいにちぶつげん　いん　しんごん

一同に大日仏眼の印・真言なり。

うたが　い　ほけきよう　しんごん　すぐ　もう　ひと　しやく

疑って云わく、法華経を真言に勝ると申す人は、この釈

もち　捨

をばいかんがせん。用いるべきか、またすつべきか。

こた　ほとけ　みらい　さだ　のたま　ほう　よ　にん　よ

答う。仏の未来を定めて云わく「法に依って人に依ら

りゆうじゆぼさつ　い　しゆたら　よ　びやくろん

ざれ」。竜樹菩薩云わく「修多羅に依るは白論なり。修多羅

よ　こくろん　てんだいい　しゆたら　あ

に依らざるは黒論なり」。天台云わく「また修多羅と合わば、

ろく もち もんな ぎ 々な しんじゅ

録してこれを用いる。文無く義無ければ信受すべからず」。

でんぎようだいしい ぶつせつ えびよう くでん しん

伝教大師云わく「仏説に依憑せよ。口伝を信ずることなか

れ」等云々。これらの経・論・釈のごときんば、夢を本に きよう ろん しゃく ゆめ もと

はすべからず。ただついさして法華経と大日経との勝劣 きよう ろん もん だい けつ しょうれつ

突 指 ほけきよう だいにちきよう

を分明に説きたらん経・論の文こそたいせちに候わめ。 ふんみよう と きよう ろん もん だい けつ しょうら

ただし、印・真言なくば木画の像の開眼のこと、これま いん しんごん もくえ ぞう かいげん もくえ かいげん

たおこのことなり。真言のなかりし已前には、木画の開眼は 痴 しんごん いぜん もくえ かいげん

なかりしか。天竺・漢土・日本には真言宗已前の木画の像 てんじく かんど にほん しんごんしゅういぜん もくえ ぞう

は、あるいは行き、あるいは説法し、あるいは御物言いあ い せつぽう おんものい

り。いん しんごん 印・真言をもつてほとけ くよう 仏を供養せしよりこのかた、利生もりしよう

かたがた失せたるなり。う これは常の論談の義なり。つね ろんだん ぎ この一事いちじ

においては、ただし、日蓮は分明の証拠を余所に引くべかにちれん ふんみよう しょうこ よそ ひ

らず。じかくだいし おんしやく あお しん そうろう 慈覚大師の御釈を仰いで信じて候なり。

と い しん 問うて云わく、いかにと信ぜらるるや。

こた い ゆめ こんげん しんごん ほけきよう すぐ つく 答えて云わく、この夢の根源は、真言は法華経に勝ると造

さだ おん 夢 ゆめきちむ り定めての御ゆめなり。この夢吉夢ならば、慈覚大師の合わ

たも しんごんすぐ にちりん い せさせ給うがごとく真言勝るべし。ただし、日輪を射ると

夢 きちむ ないてんごせん ゆめにみたるは、吉夢なりというべきか。内典五千・

しちせんよかん げてんさんぜんよかん なか ひ い 夢 み きちむ
七千余巻、外典三千余巻の中に、日を射るとゆめに見て吉夢

しょうこ 承
なる証拠をうけたまわるべし。

しょうしよう い もう あじやせおう てん つきお
少々これより出だし申さん。阿闍世王は天より月落つ

夢

ぎ ばだいじん あ

たま

だいじん あ

とゆめにみて、耆婆大臣に合わせさせ給いしかば、大臣合わ

い

ほとけ ごにゆうめつ

しゅばつだら てん

ひ お

せて云わく「仏の御入滅なり」。須拔多羅、天より日落つ

夢

われ 合

い

ほとけ

ごにゆうめつ

とゆめにみる。我とあわせて云わく「仏の御入滅なり」。

しゅら

たいしゃく

かつせん

とき

にちがつ

射

か

修羅は帝釈と合戦の時、まず日月をいたてまつる。夏の

けつ

いん

ちゆう

もう

あくおう

つね

ひ

射

み

滅

くに

桀・殷の紂と申せし悪王は、常に日をいて身をほろぼし国

破

ま やぶにん

ひ

孕

夢

しったたいし

をやぶる。摩耶夫人は、日をはらむとゆめにみて悉達太子を

生

たも

ほとけ

童

名

につしめ

うませ給う。かるがゆえに仏のわらわなをば日種という。

にほんこく

もう

てんしやうだいじん

につてん

故

日本国と申すは、天照太神の日天にしてましますゆえなり。

夢

てんしやうだいじん

でんぎやうだいし

しやかぶつ

ほけきやう

されば、このゆめは天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華経

射

や

にぶ

しよ

そうろう

にちれん

をいたてまつれる矢にてこそ二部の疏は候なれ。日蓮は

ぐち

もの

きやうろん

知

ゆめ

愚癡の者なれば経論もしらず。ただ「この夢をもつて

ほけきやう

しんごん

勝

もう

ひと

こんじやう

くに

亡

法華経に真言すぐれたりと申す人は、今生には国をほろぼ

いえ

うしな

ごしやう

阿鼻

じごく

い

知

し家を失い、後生にはあび地獄に入るべし」とはしりて

そうろう

候。

いま

げんしやう

にほんこく

もうこ

かつせん

いっさい

今、現証あるべし。日本国と蒙古との合戦に一切の

しんごんし

じようぶく

おこな

そうら

にほん勝

そうろう

真言師の調伏を行い候えば、日本かちて候ならば、

しんごん

思

そうら

じようきゆう

真言はいみじかりけりとおもい候いなん。ただし、承久

かつせん

しんごんし

祈

そうら

じようぶく

の合戦にそこばくの真言師のいのり候いしが、調伏せら

たま

ごんのだいぶどの

勝

たま

ごとばいん

おきのくに

みこ

れ給いし権大夫殿はかたせ給い、後鳥羽院は隠岐国へ、御子

てんし

さど

しまじま

じようぶく

そうら

けつく

の天子は佐渡の島々へ調伏しやりまいらせ候いぬ。結句

やかん

鳴

み

負

かえ

ほんにん

っ

は野干のなきの身におうなるように、「還つて本人に著きな

きようもん

少

違

えいざん

さんぜんにん

鎌

倉

ん」の経文にすこしもたがわず。叡山の三千人、かまくら

攻

いちどう

従

果

にせめられて一同にしたがいはてぬ。

いま

鎌

倉

よ

盛

とうじ

しかるに、今はかまぐらの世さかななるゆえに、東寺・

てんだい おんじよう しちじ しんごんしとう

じりゆう

天台・園城・七寺の真言師等と、ならびに自立をわすれた

ほけしゆう ほうぼう ひとびと かんとう 落 下 こうべ 傾

る法華宗の謗法の人々、関東におちくだりて、頭をかたぶ

膝 屈 様 々 ぶし こころ

しよじしよさん

け、ひざをかがめ、ようように武士の心をとりて、諸寺諸山

べつとう りようり おうい うしな あくほう 取 出

の別当となり長吏となりて、王位を失いし悪法をとりいだ

こくどあんのん 祈 しょうぐんけ しよじゆう さむらい いげ

して国土安穩といのれば、將軍家ならびに所従の侍已下

こくど あんのん 打 思

は国土の安穩なるべきことなんめりとうちおもいてあるほ

ほけきよう うしな たいか そう もち くにさだ

どに、法華經を失う大禍の僧どもを用いらるれば、国定め

亡

てほろびなん。

ぼうこく 悲 ぼうしん 歎 しんみよう 捨

亡国のかなしき、亡身のなげかしさに、身命をすててこ

の^{こと}をあらわすべし。^頭 国主世を持つべきならば、あやし^怪

思

尋

讒

言

言

葉

とおもいてたずぬべきところに、ただざんげんのことばの

もち

様

々

怨

ほけきようしゅご

み用いて、ようようのあだをなす。しかるに、法華經守護の

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

してん

ちじんとう

いにしえ

ほうぼう

ふしぎ

梵天・帝釈・日月・四天・地神等は、古の謗法をば不思議

思

知

ひと

いっし

あくじ

とはおぼせども、これをしれる人なければ、一子の悪事の

打

許

偽

愚

とき

ごとくうちゆるしていつわりおろかなる時もあり、また、

抓

知

とき

いま

ほうぼう

もち

すこしつみしらする時もあり。今は謗法を用いたるだに

ふしぎ

希

々

かんぎよう

ひと

怨

不思議なるに、まれまれ諫曉する人を、かえりてあだをな

いちにちにち

ひとつきふたつき

いちねんにねん

すうねん

およ

か

す。一日二日、一月二月、一年二年ならず、数年に及ぶ。彼

ふきようぼさつ

じようもく

なん

あ

勝

かくとくびく

の不軽菩薩の杖木の難に値いしにもすぐれ、覚徳比丘の

さつがい

およ

超

ぼんしゃく

におう

殺害に及びしにもこえたり。しかるあいだ、梵釈の二王・

にちがつ

してん

しゆしやう

ちじんとう

様々

怒

たびたび

諫

日月・四天・衆星・地神等、ようようにいかり、度々いさめ

怨

てん

おんはか

らるれども、いよいよあだをなすゆえに、天の御計らいと

りんごく

しやうにん

仰

付

戒

して、隣国の聖人におおせつけられてこれをいましめ、

だいきじん

くに

い

ひと

こころ

誑

じかいほんぎやく

大鬼神を国に入れて人の心をたばらかし、自界反逆せし

きつきやう

ずいだい

なんおお

理

む。吉凶につけて瑞大なれば難多かるべきことわりにて、

ほとけ

めつごにせんにひやくさんじゆうよねん

あいだ

出

だいちやうせい

仏の滅後二千二百三十余年が間、いまだいでざる大長星、

震

おおじ

震

しゆつたい

いまだふらざる大地しん出来せり。

かんど

にほん

ちえ

さいのう

しょうにん

たびたび

漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度々ありし

にちれん

ほけきよう

方

人

こくど

ごうてき

かども、いまだ日蓮ほど法華經のかとうどして国土に強敵

おお 設

もの

がんぜん

こと

にちれん

多くもうけたる者なきなり。まず眼前の事をもつて日蓮は

えんぶだいいち

もの

知

閻浮第一の者としるべし。

ぶつぼう

にほん

ななひやくよねん

いっさいきよう

ごせん

しちせん

仏法、日本にわたつて七百余年、一切經は五千・七千、

しゅう はつしゅう

じっしゅう

ちじん

とうま

ぐつう

ちくい

似

宗は八宗・十宗、智人は稻麻のごとし、弘通は竹葦に

ほとけ

あみだぶつ

しよぶつ

みようごう

みだ

たり。しかれども、仏には阿弥陀仏、諸仏の名号には弥陀

みようごう

広

そうら

みようごう

の名号ほどひろまりておわするは候わず。この名号を

ぐつう

ひと

えしん

おうじようようしゅう

にほんこくさんぶん

いち

弘通する人は、恵心は往生要集をつくる。日本国三分が一

いちどう

みだねんぶつしや

ようかん

じゅういん

おうじようこう

しき

造

は一同の弥陀念仏者。永観は十因と往生講の式をつくる。

ふそうさんぶん

にぶん

いちどう

ねんぶつしや

ほうねん

選

扱

造

扶桑三分が二分は一同の念仏者。法然せんちやくをつくる。

ほんちよういちどう

ねんぶつしや

いま

みだ

みようこう

とな

本朝一同の念仏者。しかれば、今の弥陀の名号を唱うる

ひとびと

ひとり

でし

ねんぶつ

もう

人々は、一人が弟子にはあらず。この念仏と申すは、

そうかんぎよう

かんぎよう

あみだきよう

だいみよう

ごんだいじようきよう

だいもく

双観経・観経・阿弥陀経の題名なり。権大乘経の題目

こうせんるふ

じつだいじようきよう

だいもく

るふ

じよ

の広宣流布するは、実大乘経の題目の流布せんずる序に

こうろ

ひと

推

ごんきようるふ

あらずや。心あらん人は、これをすいしぬべし。権経流布

じつきようるふ

ごんきよう

だいもくるふ

じつきよう

だいもく

せば実経流布すべし。権経の題目流布せば、実経の題目

るふ

きんめい

とうてい

ななひやくよねん

また流布すべし。欽明より当帝にいたるまで七百余年、い

聞

まだきかず、いまだ見ず、南無妙法蓮華經と唱えよと他人を

勸

われ とな

ちじん

ひい

ほし 隠

すすめ、我と唱えたる智人なし。日出でぬれば星かくる。

けんおうきた

ぐおう 滅

じつきようる ふ

ごんきよう

止

賢王来れば愚王ほろぶ。実經流布せば權經のとどまり、

ちじんなんみようほうれんげきよう

とな

ぐにん

したが

かげ

智人南無妙法蓮華經と唱えば愚人のこれに随わんこと、影

み

こえ ひび

と身と、声と響きとのごとくならん。

にちれん

にほんだいいち

ほけきよう

ぎようじや

うたが

日蓮は日本第一の法華經の行者なること、あえて疑い

かんど

がっし

いちえんぶだい

うち

なし。これをもつてすいせよ。漢土・月支にも一閻浮提の内

かた

もの あ

にも、肩をならぶる者は有るべからず。

と い

しようか

おおじ

震

ぶんえい

だいすいせい

問うて云わく、正嘉の大地しん、文永の大彗星は、いか

なることによつて出来せるや。
しゅつたい

こた い てんだいい ちじん き し じゃ みずか
答えて云わく、天台云わく「智人は起を知り、蛇は自ら

じゃ し とううんぬん
蛇を識る」等云々。

と い こころ
問うて云わく、心いかん。

こた い じようぎようぼさつ だいち しゅつげん たま
答えて云わく、上行菩薩の大地より出現し給いたりし

みろくぼさつ もんじゅしりぼさつ かんぜおんぼさつ やくおうぼさつとう
をば、弥勒菩薩・文殊師利菩薩・觀世音菩薩・藥王菩薩等の

しじゅういっぽん むみよう だん ひとびと がんぼん むみよう だん
四十一品の無明を断ぜし人々も、元品の無明を断ぜざれば

ぐにん じゆりようほん なんみようほうれんげきよう まつぼう るふ
愚人といわれて、寿量品の南無妙法蓮華經の末法に流布せ

ぼさつ め い 知
んずるゆえにこの菩薩を召し出だされたるとは、しらざり

しということなり。

問うて云わく、日本・漢土・月支の中にこのことを知る人

あるべしや。

答えて云わく、見思を断尽し四十一品の無明を尽くせる

大菩薩だにも、このことをしらせ給わず。いかにいおうや、

一毫の惑をも断ぜぬ者どももの、このことを知るべきか。

問うて云わく、智人なくば、いかでかこれを対治すべき。

例せば、病の所起を知らぬ人の病人を治すれば、人必ず

死す。この災いの根源を知らぬ人々がいのりをなさば、国

ほろ

うたが

浅

まさに亡びんこと疑いなきか。あらあさましや、あらあさ

ましや。

こた

い

じゃ

なのか

うつ

おおあめ

知

からす

ねんちゆう

答えて云わく、蛇は七日が内の大雨をしり、鳥は年中の

きつきよう

知

すなわ

だいいりゆう

しよじゆう

きゆうがく

吉凶をしる。これ則ち大竜の所従、また久学のゆえか。

にちれん

ぼんぷ

知

日蓮は凡夫なり。このことをしるべからずといえども、

なんだち

論

か

しゆう

へいおう

とき

かぶろ

汝等にほぼこれをさとさん。彼の周の平王の時、禿にし

はだか

ものしゆつげん

しんゆう

もの

占

い

て裸なる者出現せしを、辛有といいし者うらなつて云わ

ひやくねん

うち

よ

滅

おな

ゆうおう

とき

さんせん

崩

く「百年が内に世ほろびん」。同じき幽王の時、山川くずれ、

だいち

震

はくよう

ものかんが

じゆうにねん

うち

大地ふるいき。白陽という者勘えていわく「十二年の内に、

だいおうこと

あ

たも

いま

おおじしん

だいちようせいとう

こくしゆ

大王事に値わせ給うべし」。今の大地震・大長星等は、国主

にちれん

憎

ぼうこく

ほう

ぜんしゆう

ねんぶつしや

しんごんし

日蓮をにくみて亡国の法たる禅宗と念佛者と真言師を

方 人

てん 怒

たま

出

たも

かとうどせらるれば、天いからせ給いていださせ給うとこ

さいなん

ろの災難なり。

と い

しん

問うて云わく、なにをもつてかこれを信ぜん。

こた

い

さいしyouおうきよう

い

あくにん

あいぎよう

ぜんにん

答えて云わく、最勝王経に云わく「悪人を愛敬し善人

じばつ

よ

ゆえ

しyouしゆく

ふうう

みな

とき

を治罰するに由るが故に、星宿および風雨、皆、時をも

おこな

とううんぬん

きyouもん

くに

つて行われず」等云々。この経文のごときんば、この国に

あくにん

おうしん

きえ

うたが

悪人のあるを王臣これを帰依すということ疑いなし。また、

くに ちじん

こくしゅ

憎

怨

この国に智人あり、国主これをにくみてあだすということ

うたが

さんじゅうさんてん

しゅ

ふんぬ

もまた疑いなし。また云わく「三十三天の衆、みな忿怒の

こころ しょう

へんげ

りゅうせいお

に ひぐじ

い

心を生ず。変怪あつて、流星墮ち、二の日俱時に出で、

たほう

おんぞくきた

こくじんそうらん

あ

とううんぬん

他方の怨賊来つて、国人喪乱に遭わん」等云々。すでにこ

くに

てんぺん

ちよう

たこく

責

さんじゅうさんてん

の国に天変あり、地天あり、他国よりこれをせむ。三十三天

おん 怒

うたが

にんのうきよう

い

の御いかりあること、また疑いなきか。仁王経に云わく

もろもろ

あくびく

おお

りようり

もと

こくおう

たいし

おうじ

まえ

「諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子の前

みずか

はぶつぼう

いんねん

はこく

いんねん

と

において、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。その

おうわきま

ことば

しんちよう

とううんぬん

い

王別えずしてこの語を信聴せん」等云々。また云わく

にちがつど

うしな

じせつほんぎやく

しやくにちい

「日月度を失い、時節反逆し、あるいは赤日出で、ある

こくにちい

に

さん

し

ご

ひい

ひしよく

いは黒日出で、二・三・四・五の日出で、あるいは日蝕し

ひかりな

にちりんいちじゅう

にじゅう

し

ご

りんげん

て光無く、あるいは日輪一重、二重、四・五重の輪現ず」

とううんぬん

等云々。

もん

こころ

あくび

くとうくに

じゅうまん

こくおう

たいし

おうじとう

文の心は、悪比丘等国に充滿して、国王・太子・王子等

誑

はぶつぼう

はこく

いんねん

説

くに

おう

をたぼらかして、破仏法・破国の因縁をとかば、その国の王

とう

ひと

誑

思

様

ほう

じぶつぼう

等この人にたぼらかされておぼすよう「この法こそ持仏法

いんねん

じこく

いんねん

思

ことば

納

おこな

の因縁、持国の因縁」とおもい、この言をおさめて行かう

にちがつ

へん

おおかせ

おおあめ

たいかとうしゅつたい

つぎ

ならば、日月に変あり、大風と大雨と大火等出来し、次に

ないぞく

もう

しんるい

だいひようらん 起

わ

方

人

は内賊と申して親類より大兵乱おこり、我がかとうどしぬ

もの

みなう

うしな

のち

たこく

責

べき者をば皆打ち失つて、後には他国にせめられて、ある

じさつ

生捕

降 にな

いは自殺し、あるいはいけどりにせられ、あるいはこう人と

ぶつぽう

滅

くに

亡

ゆえ

なるべし。これひとえに、仏法をほろぼし、国をほろぼす故

なり。

しゅぎよう

い

か

しやかむにによらい

きようほう

守護経に云わく「彼の釈迦牟尼如来のあらゆる教法は、

いっさい

てんま

げどう

あくにん

ごつう

しんせん

みなないししようぶん

は

一切の天魔・外道・悪人・五通の神仙、皆乃至少分をも破

かい

みようそう

もろもろ

あくしやもん

きめつ

壊せず。しかるに、この名相の諸の悪沙門、みな毀滅し

あま

あ

しゅみせん

さんぜんかい

なか

て余り有ることなからしむ。須弥山は、たとい三千界の中の

そうもく

つ

たきぎ

ちようじ

ぶんしよう

いちごう

そん

草木を尽くして薪となし長時に焚焼すとも、一毫も損ず

ごうかお

ひうち

しょう

しゅゆ

ることなきに、もし劫火起こつて火内より生ぜば、須臾に

しょうめつ

かいじん

あま

とううんぬん

焼滅して灰燼をも余すことなきがごとし」等云々。

れんげめんきよう

い

ほとけ

あなん

つ

たと

しし

蓮華面経に云わく「仏、阿難に告げたまわく、譬えば、師子

みようじゆう

そら

じ

みず

りく

の命終せん、もしは空、もしは地、もしは水、もしは陸

しゅじよう

しし

み

にく

く

のあらゆる衆生、あえて師子の身の肉を食らわず、ただ

しし

みずか

もろもろ

むし

しょう

みずか

しし

にく

く

師子のみ自ら諸の虫を生じて、自ら師子の肉を食らう

あなん

わ

ぶつぽう

よ

よ

やぶ

がごとし。阿難よ。我が仏法は余の能く壞るにあらず、こ

わ

ほう

なか

もろもろ

あくびく

わ

さんだいあそうぎこう

ぎよう

つ

れ我が法の中の諸の悪比丘、我が三大阿僧祇劫に行を積

み 勤 苦 し 集 む る と こ ろ の 仏 法 を 破 ら ん 等 云 々 。
ごんく あつ ぶつぼう やぶ どううんぬん

経 文 の 心 は 、 過 去 の 迦 葉 仏 、 釈 迦 如 来 の 末 法 の こ と を
きようもん こころ かこ かしようぶつ しゃかによらい まつぼう

訖 哩 枳 王 に か た ら せ 給 う 。 釈 迦 如 来 の 仏 法 を ば い か な る
きりきおう 語 たも しゃかによらい ぶつぼう

も の か う し な う べ き 。 大 族 王 の 五 天 の 堂 舎 を 焼 き 払 い 、
者 失 だいぞくおう ごてん どうしゃ や はら

十 六 大 国 の 僧 尼 を 殺 せ し 、 漢 土 の 武 宗 皇 帝 の 九 国 の 寺 塔
じゆうろくたいこく そうに ころ かんどう ぶそうこうてい きゆうこく じとう

四 千 六 百 余 所 を 消 滅 せ し め 、 僧 尼 二 十 六 万 五 百 人 を 還 俗 せ
しせんろつぴやくよしよ しょうめつ そうに にじゆうろくまんごひやくにん げんぞく

し 等 の ご と く な る 悪 人 等 は 、 釈 迦 の 仏 法 を ば 失 う べ か ら ず 。
とう あくにんとう しゃか ぶつぼう うしな

三 衣 を 身 に ま と い 、 一 鉢 を 頸 に かけ 、 八 万 法 蔵 を 胸 に う か
さんね み 纏 いっぱつ くび 懸 はちまんほうぞう むね 浮

べ 、 十 二 部 経 を 口 に ず う せ ん 僧 侶 が 、 彼 の 仏 法 を 失 う べ し 。
じゆうにぶきよう くち 誦 そうりよ か ぶつぼう うしな

たと しゅみせん こがね やま さんぜんだいせんせかい そうもく

譬えば、須弥山は金の山なり、三千大千世界の草木をもつ

してん ろくよく じゅうまん 積 込 いちねん にねん

て四天・六欲に充満してつみこめて、一年・二年・

ひやくせんまんおくねん あいだ焼 いちぶん そんな

百千万億年が間やくとも、一分も損ずべからず。しかる

ごうか起 とき しゅみ ね まめ ひ出

を、劫火おこらん時、須弥の根より豆ばかりの火いでて、

しゅみせん 焼 さんぜんだいせんせかい 焼 うしな

須弥山をやくのみならず、三千大千世界をやき失うべし。

ぶつき じっしゅう はっしゅう ないてん そうとう

もし仏記のごとくならば、十宗・八宗、内典の僧等が

ぶつきよう しゅみせん や はら しょうじよう くしゃ

仏教の須弥山をば焼き払うべきにや。小乗の俱舎・

じようじつ りっそうとう だいじよう 嫉 むね しんに ほのお しんごん

成実・律僧等が大乗をそねむ胸の瞋恚は炎なり。真言の

ぜんむいとう ぜんしゅう さんがいとう じようどしゅう ぜんどうとう ぶつきよう しし

善無畏等、禅宗の三階等、浄土宗の善導等は、仏教の師子

にく

しゅつたい

こうちゅう

びく

でんぎようだいし

さんろん

の肉より出来せる蝗虫の比丘なり。

伝教大師は三論・

ほつそう

けごんとう

にほん

せきとくとう

ろくちゅう

書

たま

にちれん

法相・華嚴等の日本の碩徳等を六虫とかかせ給えり。日蓮

しんごん

ぜんしゅう

じょうどう

がんそ

さんちゅう

名

てんだいしゅう

は真言・禅宗・浄土等の元祖を三虫となづく。また天台宗

じかく

あんねん

えしんとう

ほけきよう

でんぎようだいし

しし

み

の慈覚・安然・恵心等は、法華経・伝教大師の師子の身の

なか

さんちゅう

中の三虫なり。

だいほうぼう

こんげん

糾

にちれん

怨

これらの大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば、

てんじん

惜

ちぎ

怒

たま

さいよう

おお

お

天神もおしみ、地祇もいからせ給いて、災天も大いに起こ

こころ得

いちえんぶだいだい

だいじ

もう

るなり。されば心うべし。一閻浮提第一の大事を申すゆえ

さいだいいち

ずいそう

起

に、最第一の瑞相これおこれり。

哀

あわれなるかなや、なげかしきかなや、日本国の人、皆

歎

むけんだいじよう お

よろこ

たの

無間大城に堕ちんことよ。悦ばしきかなや、楽しきかな

ふしよう み

このたびしんでん ぶつしゆ 植

や、不肖の身として今度心田に仏種をうえたる。

今

見

だいもうここく

数まんそう

ひようせん

浮

いまにしもみよ。大蒙古国、す万艘の兵船をうかべて

にほんこく 責

かみいちにん

しもばんみん

いっさい

日本国をせめば、上一人より下万民にいたるまで、一切の

ぶつじ

いっさい

じんじ

投

捨

おのおのこえ

連

仏寺、一切の神寺をばなげすてて、各々声をつるべて

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

とな

たなごころ

あ

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と唱え、掌を合わ

助 たま

にちれん

ごぼう

にちれん

ごぼう

叫

そうつら

せて「たすけ給え、日蓮の御房、日蓮の御房」とさけび候

わんずるにや。

れい

がつし

だいぞくおう

ようにちおう

たなごころ

にほん

例せば、月支の大族王は幼日王に 掌 をあわせ、日本の

むねもり

梶

原

敬

だいまん

かたき

したが

宗盛はかじわらをうやまう。大慢のものは敵に随うとい

理

か

きょうきだいまん

びくとう

はじ

う、このことわりなり。彼の軽毀大慢の比丘等は、始めに

じょうもく

調

ふきようぼさつ

う

のち

は杖木をととのえて不輕菩薩を打ちしかども、後には

たなごころ

とが

悔

だいばだつた

しやくそん

おんみ

い

掌 をあわせて失をくゆ。提婆達多は釈尊の御身に血を

出

りんじゅう

とき

なむ

とな

ぶつ

いだししかども、臨終の時には「南無」と唱えたりき。「仏」

もう

じごく

お

とだに申したりしかば地獄には墮つべからざりしを、業

深

なむ

唱

ぶつ

ふかくしてただ「南無」とのみとなえて「仏」とはいわず。

いま

にほんこく

こうそうとう

な

むにちれんしようにん

唱

今、日本国の高僧等も「南無日蓮聖人」ととなえんとすと

も「南無」ばかりにてやあらんずらん。ふびん、ふびん。なむ 不便

外典に云わく「未萌をしるを聖人という」。内典に云わ

く「三世を知るを聖人という」。

余に三度のこうみようあり。

一には、去にし文応元年太歳庚申七月十六日に、

立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時、宿屋入道

に向かつて云わく「禅宗と念仏宗とを失い給うべしと申

させ給え。このことを御用いなきならば、この一門より事お

こりて他国にせめられさせ給うべし」。

に い ぶんえいはちねんくがつじゅうににちさるのとき へいのさえもののじよう

二には、去にし文永八年九月十二日申時に、平左衛門尉

む い にちれん にほんこく とうりよう よ うしな

に向かつて云わく「日蓮は日本国の棟梁なり。予を失う

にほんこく はしら たお ただいま じかいほんぎやくなん 同士打

は日本国の柱檣を倒すなり。只今に自界反逆難とてどしう

たこくしんぴつなん くに ひとびとたこく う ころ

ちして、他国侵逼難とてこの国の人々他国に打ち殺さるる

おお 生 捕 けんちようじ じゆふくじ

のみならず、多くいけどりにせらるべし。建長寺・寿福寺・

ごくらくじ だいぶつ りようらくじとう いつさい ねんぶつしや ぜんそうとう じとう

極楽寺・大仏・長楽寺等の一切の念仏者・禅僧等が寺塔を

焼く 払 かれ くび 由 比 浜 き

ばやきはらいて、彼らが頸をゆいのはまにて切らずば、日本

こくかなら 亡 もう そつら お

国必ずほろぶべし」と申し候い了わんぬ。

だいさん いぬるとしぶんえいじゅういちねんしがつようか さえもののじよう かた

第三には、去年文永十一年四月八日、左衛門尉に語つ

て云わく「王地おうちに生まれうたれば身みをば随したがえられたてまつる

ようなりとも、心こころをば随したがえられたてまつるべからず。念仏ねんぶつ

の無間獄むけんごく、禅ぜんの天魔てんまの所為しよいなることは疑うたがいなし。殊ことに

真言宗しんごんしゅうがこの国土こくどの大おおなるわざわいに禍ては候そうろうなり。

大蒙古だいもうこを調伏じょうぶくせんこと、真言師しんごんしには仰おおせ付けらるべからず。

もし大事だいじを真言師しんごんし調伏じょうぶくするならば、いよいよいそいでこの

国くにほろぶべし」と申もうせしかば、頼綱よりつなと問いうて云わく「いつご

ろか、よせ候きようもんべき」。予よ、言いわく「経文きやうもんにはいつとはみえ

候そうらわねども、天てんの御みけしききいかり怒すくな少からず。きゆうに急

見えて候。よも今年はすごし候わじ」と語りたりき。

この三つの大事は日蓮が申したるにはあらず。ただひと

えに、釈迦如来の御神、我が身に入りかわらせ給いける

にや。我が身ながらも悦び身にあまる。法華經の一念三千

と申す大事の法門はこれなり。經に云わく「いわゆる諸法

の如是相」と申すは何事ぞ。十如是の始めの相如是が第一の

大事にて候えば、仏は世にいでさせ給う。「智人は起をし

る。蛇はみずから蛇をしる」とは、これなり。

衆流あつまりて大海となる。微塵つもりて須弥山となれ

にちれん ほけきよう しん はじ にほんこく いったいいちみじん

り。日蓮が法華經を信じ始めしは、日本国には一滯一微塵の

ほけきよう ににん さんにん じゅうにん ひやくせんまんおくにんとな つた

ごとし。法華經を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝う

みようかく しゅみせん だいねはん たいかい

るほどならば、妙覺の須弥山ともなり、大涅槃の大海とも

ほとけ 成 みち 求

なるべし。仏になる道は、これよりほかに、またもとむる

ことなかれ。

と だい に ぶんえいはちねんくがつじゅうににち ごかんき とき

問うて云わく、第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時

われ 損 じた 戦 起

は、いかにとして、我をそんぜば自他のいくさおこるべし

知 たも

とはしり給うや。

こた だいじつきようごじゅう い もろもろ せつりこくおう

答う。大集經五十に云わく「もしまた、諸の刹利国王

にして諸の非法を作し、世尊の声聞の弟子を悩乱し、も

きめ

とうじよう

ちようしやく

えはつ

しゆじゆ

しはもつて毀罵し、刀杖もて打斫し、および衣鉢・種々

しぐ

うば

た

きゆうせ

るなん

な

ものあ

われ

の資具を奪い、もしは他の給施に留難を作す者有らば、我ら

かれ

じねん

にわ

たほう

おんてき

お

は彼をして自然に卒かに他方の怨敵を起こさしめ、および

じかい

こくど

ひようき

きえき

ききん

ひじ

ふうう

自界の国土にもまた兵起・飢疫・飢饉・非時の風雨・

とうじようごんしろう

きぼう

おう

ひさ

鬪諍言訟・譏謗あらしめ、またその王をして久しからず

まさ

おの

くに

ぼうしつ

とううんぬん

してまた当に己が国を亡失すべからしむ」等云々。

そ

しよきよう

しよもんおお

きようもん

み

当

夫れ、諸経に諸文多しといえども、この経文は身にあた

とき

臨

こと

たつと

覺

撰

出

り時にのぞんで殊に尊くおぼうるゆえに、これをせんじい

きようもん

われ

ぼんのう

たいしやく

だいろうくてん

まおう

だす。この経文に「我ら」とは、梵王と帝釈と第六天の魔王

にちがつ

してんとう

さんがい

いつさい

てんりゆうとう

と日月と四天等の三界の一切の天竜等なり。これらの

じようしゆ

ぶつぜん

けい

ちか

い

ほとけ

めつご

しようほう

上主、仏前に詣して誓つて云わく「仏の滅後、正法・

ぞうほう

まつだい

なか

しようほう

ぎよう

もの

じゃほう

びくとう

こくしゆ

像法・末代の中に正法を行ぜん者を邪法の比丘等が国主

訴

おう

ちか

おう

こころ寄

もの

わ

にうつたえば、王に近きもの、王に心よせなる者、我が

尊

思

もの

りふじん

ぜひ

ただ

たつとしとおもう者のいうことなれば、理不尽に是非を糾

か

ちじん

恥

及

さず彼の智人をさんざんとはじにおよばせなんどせば、そ

ゆえ

くに

だいひようらんしゆつげん

のち

の故ともなく、その国ににわかに大兵乱出現し、後には

たこく

責

こくしゆ

失

くに

亡

他国にせめらるべし。その国主もうせ、その国もほろびな

説

そうろう

痛

痒

んず」ととかれて候。いたいとかゆきとは、これなり。

よみ

こんじよう

とが

くに

助

予が身には今生にはさせる失なし。ただ国をたすけんが

しょうごく

おん

報

もう

おんもち

ため、生国の恩をほうぜんと申せしを、御用いながらんこ

ほい

めい

ほけきよう

そ本意にあらざるに、あまつさえ召し出だして、法華経の

だいご

まき

かいちゆう

取

出

散

々

苛

第五の巻を懷中せるをとりいだしてさんざんとさいなみ、

けつく

小路

渡

もう

結句はこうじをわたしなんどせしかば、申したりしなり。

にちがつ

てん

しよ

たま

にちれん

だいなん

遭

こんど代

「日月、天に処し給いながら、日蓮が大難にあうを今度かわ

たま

ひと

にちれん

ほけきよう

ぎようじや

らせ給わずば、一つには、日蓮が法華経の行者ならざるか、

じゃけん

改

にちれん

ほけきよう

ぎようじや

たちまちに邪見をあらたむべし。もし日蓮、法華経の行者

ならば、たちまちに国に^{くに}しるしを見せ給え。もししからず

いま^{いま}にちがつとう^{にちがつとう}　しゃか^{しゃか}　たほう^{たほう}　じつぼう^{じつぼう}　ほとけ^{ほとけ}　たてまつ^{たてまつ}

ば、今の日月等は釈迦・多宝・十方の仏をたぶらかし奉

だいもうご^{だいもうご}　ひと^{ひと}　だいは^{だいは}　こおうざい^{こおうざい}　くぎやり^{くぎやり}　だいもうご^{だいもうご}

る大妄語の人なり。提婆が虚誑罪、俱伽利が大妄語にも

ひやくせんまんおくばい過^{ひやくせんまんおくばい過}　たま^{たま}　だいもうご^{だいもうご}　てん^{てん}　こえ^{こえ}

百千万億倍すぎさせ給える大妄語の天なり」と声をあげて

もう^{もう}　しゅつたい^{しゅつたい}　じかいほんぎやくなん^{じかいほんぎやくなん}

申せしかば、たちまちに出来せる自界反逆難なり。

こくど^{こくど}　甚^甚　乱^乱　わ^わ　み^み　言^言

されば、国土いたくみだれば、我が身はいうにかいなき

ぼんぷ^{ぼんぷ}　おんきよう^{おんきよう}　たも^{たも}　そうろうぶんざい^{そうろうぶんざい}　とうせい^{とうせい}

凡夫なれども、御経を持ちまいらせ候分齊は、当世には

にほんだいいち^{にほんだいいち}　だいにん^{だいにん}　もう^{もう}

日本第一の大人なりと申すなり。

と^と　い^い　まんぼんのう^{まんぼんのう}　しちまん^{しちまん}　くまん^{くまん}　はちまん^{はちまん}　なんじ^{なんじ}　だいまん^{だいまん}

問うて云わく、慢煩悩は七慢・九慢・八慢あり。汝が大慢

ぶつきよう

あ

だいまん

ひやくせんまんおくばい

は、仏教に明かすところの大慢にも百千万億倍すぐれた

か

とくこうろんじ

みろくぼさつ

らい

だいまんばらもん

ししよう

り。彼の徳光論師は弥勒菩薩を礼せず。大慢婆羅門は四聖を

ぎ

だいてん

ぼんぷ

あらかん

名乗

むくろんじ

座とせり。大天は凡夫にして阿羅漢となる。無垢論師が

ごてんだいいち

言

みな

あび

お

むけん

ざいにん

五天第一といいし。これらは皆、阿鼻に堕ちぬ。無間の罪人

なんじ

いちえんぶだいいいち

ちじん

名乗

じごく

お

なり。汝いかでか一閻浮提第一の智人となる。地獄に堕

恐

ちざるべしや。おそろし、おそろし。

こた

い

なんじ

しちまん

くまん

はちまんとう

知

答えて云わく、汝は七慢・九慢・八慢等をばしれりや。

だいかくせそん

さんがいだいいち

名乗

たも

いつさい

げどう

い

大覺世尊は三界第一となのらせ給う。一切の外道が云わく

ただいま

てん

ぼつ

だいち破

い

にほんこく

「只今、天に罰せらるべし。大地われて入りなん」。日本国

しちじさんびやくよにん

い

さいちようほつし

だいてん

そせい

てつぷく

の七寺三百余人が云わく「最澄法師は大天が蘇生か、鉄腹

さいたん

とううんぬん

てん

ばつ

が再誕か」等云々。しかりといえども、天も罰せず、かえ

そう

しゅご

じ

破

こんごう

でんぎようだいし

つて左右を守護し、地もわれず、金剛のごとし。伝教大師

えいざん

た

いっさいしゅじよう

がんもく

けつく

しちだいじ

お

は叡山を立てて一切衆生の眼目となる。結句、七大寺は落

でし

しよこく

だんな

げん

すぐ

ちて弟子となり、諸国は檀那となる。されば、現に勝れた

すぐ

似

だいくどく

るを勝れたりということは、慢ににて大功徳となりけるか。

でんぎようだいし

てんだいほつけしゆう

しよしゆう

すぐ

しゆう

伝教大師云わく「天台法華宗の諸宗に勝ることは、宗

きよう

よ

ゆえ

じさんきた

とううんぬん

とするところの経に拠るが故に、自讃毀他ならず」等云々。

ほけきようだいし

い

しゅせん

なか

しゅみせん

だいいち

法華経第七に云わく「衆山の中に須弥山はこれ第一なり。

ほけきよう

しよきよう

なか

もつと

この法華經もまたかくのごとく、諸經の中において、最も

かみ

とううんぬん

きようもん

いせつ

けごん

はんにや

これその上なり」等云々。この經文は、已説の華嚴・般若・

だいにちきようとう

こんせつ

むりようぎきよう

とうせつ

ねはんぎようとう

ごせん

しちせん

大日經等、今説の無量義經、当説の涅槃經等の五千・七千、

がつし

りゆうぐう

しおうてん

とうりてん

にちがつ

なか

いっさいきよう

じんじつぼうかい

月支・竜宮・四王天・忉利天・日月の中の一經、尽十方界

しよきよう

どせん

こくせん

しやうてつちせん

だいせつちせん

にほん

の諸經は、土山・黒山・小鉄圀山・大鉄圀山のごとし。日本

こく

渡

たま

ほけきよう

しゆみせん

国にわたらせ給える法華經は須弥山のごとし。

い

よ

きようてん

じゆじ

もの

また云わく「能くこの經典を受持することあらん者もま

いっさいしゆじよう

なか

だいいち

たかくのごとく、一切衆生の中において、またこれ第一な

とううんぬん

きようもん

あん

けごんぎよう

たも

り」等云々。この經文をもつて案ずるに、華嚴經を持てる

ふげんぼさつ げだつがつぼさつとう りゆうじゆぼさつ めみようぼさつ ほうぞうだいし

普賢菩薩・解脱月菩薩等・竜樹菩薩・馬鳴菩薩・法蔵大師・

しょうりようこくし そくてんこうごう しんじようだいとく ろうべんそうじよう しょうむてんのう

清涼国師・則天后・審祥大徳・良弁僧正・聖武天皇、

じんみつ はんにやきよう たも しょうぎしょうぼさつ しゆぼだいそんじや かじよう

深密・般若経を持てる勝義生菩薩・須菩提尊者・嘉祥

だいし げんじようさんぞう たいそう こうそう かんろく どうしよう こうとくてんのう しんごんしゅう

大師・玄奘三蔵・太宗・高宗・観勒・道昭・孝徳天皇、真言宗

だいにちきよう たも こんごうさつた りゆうみようぼさつ りゆうちぼさつ

の大日経を持てる金剛薩埵・竜猛菩薩・竜智菩薩・

いんじようおう ぜんむいさんぞう こんごうちさんぞう ふくうさんぞう げんそう だいそう

引生王・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・玄宗・代宗・

けいか こうぼうだいし じかくだいし ねはんぎよう たも かしようどうじぼさつ

恵果・弘法大師・慈覚大師、涅槃経を持ちし迦葉童子菩薩・

ごじゆうにるい どんむしんさんぞう こうたくじほううん なんさんほくしち じっしとう

五十二類・曇無讖三蔵・光宅寺法雲・南三北七の十師等よ

まつだいあくせ ぼんぷ いっかい たも いっせんだい

りも、末代悪世の凡夫の、一戒も持たず、一闡提のごとく

ひと

おも

きようもん

いこんとう

勝

に人には思われたれども、経文のごとく已今当にすぐれて

ほけきよう

ほか

ほとけ

成

みち

ごうじよう

しん

法華経より外は仏になる道なしと強盛に信じて、しかも

いちぶん

げ

ひとびと

かれ

だいしろう

ひやくせんおくばい

一分の解なからん人々は、彼らの大聖には百千億倍の

勝

もう

きようもん

まさりなりと申す经文なり。

か

ひとびと

か

きようぎよう

ひと

い

彼の人々は、あるいは彼の経々にしばらく人を入れて

ほけきよう

移

ひと

か

きよう

法華経へうつさんがためなる人もあり。あるいは彼の経に

じやく

ほけきよう

い

ひと

か

きようぎよう

著をなして法華経へ入らぬ人もあり。あるいは彼の経々

とどこ

か

きようぎよう

ふか

しゅう

に留まるのみならず、彼の経々を深く執するゆえに、

ほけきよう

か

きよう

おと

ひと

いま

ほけきよう

法華経を彼の経に劣るという人もあり。されば、今、法華経

ぎようじゃ ころ得

いつさい せんるこうが しよすい なか

の行者は心うべし。「譬えば、一切の川流江河の諸水の中

うみ だいいち

ほけきよう たも もの

に、海はこれ第一なるがごとく、法華經を持つ者もまたか

もろもろ ほし なか がってんし もつと

だいいち

くのごとし。また衆の星の中に月天子は最もこれ第一な

ほけきよう たも もの

とう おん

るがごとく、法華經を持つ者もまたかくのごとし」等と御

ころ得

とうせいにほんこく ちじんとう もろもろ ほし

心えあるべし。当世日本国の智人等は衆の星のごとし、

にちれん まんげつ

日蓮は満月のごとし。

と い いにしえ

言 ひと

問うて云わく、古かくのごとくいえる人ありや。

こた い でんぎようだいし い まさ し

たしゆう

答えて云わく、伝教大師の云わく「当に知るべし、他宗

よ きよう もつと だいいち

よ

の依るところの経はいまだ最もこれ第一ならず。その能

きよう たも もの

だいいち

てんだいほつけしゆう

たも

く経を持つ者もまたいまだ第一ならず。

天台法華宗の持つ

きよう もつと

だいいち

ゆえ

よ ほつけ

たも

ところの経は最もこれ第一なるが故に、能く法華を持つ

もの しゅじよう

なか だいいち

ぶつせつ

よ

者もまた衆生の中に第一なり。すでに仏説に拠る。あに

じたん

とううんぬん

そ

き

お

蜚

いちにち

自歎ならんや」等云々。夫れ、驥の尾につけるだにの一日に

せんり

と

言

りんおう

したが

れっぷ

しゅゆ

してんげ

千里を飛ぶといい、輪王に随える劣夫の須臾に四天下を

巡

なん

うたが

じたん

めぐるというをば難ずべしや、疑うべしや。「あに自歎な

しゃく

きも

銘

ほけきよう

らんや」の釈は肝にめいずるか。もししからば、法華経を

きよう

たも

ひと

ぼんのう

勝

たいしゃく

超

経のごとくに持つ人は、梵王にもすぐれ、帝釈にもこえ

しゅら

したが

しゅみせん

担

りゆう

責

たり。修羅を随えば須弥山をもにないぬべし。竜をせめ

使 たいかい 汲 く 干 かん

つかわば大海をもくみほしぬべし。

でんぎようだいしい ほ もの ふく あんみよう つ そし もの

伝教大師云わく「讃むる者は福を安明に積み、謗る者は

つみ むけん ひら とううんぬん ほけきよう い きよう どくじゆ しよじ

罪を無間に開く」等云々。法華經に云わく「經を讀誦し書持

もの み きようせんぞうしつ けつこん いだ

することあらん者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懷かん

ないし ひと みようじゆう あびごく い とううんぬん きようしゆ

乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」等云々。教主

しやくそん きんげん 実 たほうぶつ しやうみよう 違

釈尊の金言まことならば、多宝仏の証明たがわずば、

じつぽう しよぶつ ぜつそういちじゆ いま にほんこく いつさいしゆじようむけん

十方の諸仏の舌相一定ならば、今、日本国の一切衆生無間

じごく お うたが ほけきよう はち まき い

地獄に堕ちんこと疑うべしや。法華經の八の卷に云わく

のち よ きようてん じゆじ どくじゆ ないしねが

「もし後の世においてこの經典を受持・讀誦せば乃至願う

ところむなは虚げんぜしからじ。また現世ふくほうにおいて、その福報えを得ん。

また云いわく「もしこれくようを供養さんたんし讃歎まさすることあらば、当こんに今

世ぜにおいて現げんの果報かほうを得べし」等云々。この二つの文うの中に

「亦やく於現世げんぜ得其福報ふくほう（また現世えにおいて、その福報えを得ん）

の八字はちじ、「当とう於今世こんぜ得現果報まさ（当こんぜに今世げんにおいて現かほうの果報うを

得べし）」の八字はちじ、已上いじようじゆうろくじ十六字の文もんむなくして日蓮にちれん今生こんじように

大果報だいかほうなくば、如来にようらいの金言きんげんは提婆だいばが虚言そらごとに同じく、多宝たほうの

証明しょうみようは俱伽利くぎやりが妄語もうごに異ことならじ。謗法ほうぼうの一切衆生いつさいしゆじようも

阿鼻地獄あびじごくに墮おつべからず。三世さんぜの諸仏しよぶつもましまさざるか。
在

わ でしとう ころ ほけきよう しんみよう 惜
されば我が弟子等、心みに法華經のごとく身命もおし

しゅぎよう

たびぶつぼう

ころ

なんみようほうれんげきよう

まず修行して、この度仏法を心みよ。南無妙法蓮華經、

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經。

ほけきよう

もん

われ

しんみよう

あい

そもそも、この法華經の文に「我は身命を愛せず、ただ

むじようどう

お

ねはんぎよう

い

たと

おうし

無上道を惜しむのみ」。涅槃經に云わく「譬えば、王使のよ

だんろん

ほうべん

たく

めい

たこく

たてまつ

く談論して方便に巧みなるもの、命を他国に奉るに、む

しんみよう

うしな

つい

おう

と

ごんきよう

かく

しろ身命を喪うとも、終に王の説くところの言教を匿さ

ちしや

ほんぷ

なか

ざるがごとく、智者もまたしかなり。凡夫の中において

しんみよう

お

だいじようほうどう

によらいひぞう

身命を惜しまず、かならず『大乗方等の如来秘藏には、

いっさいしゅじょう　みなぶつししょうあ　せんぜつ　とううんぬん
一切衆生に皆仏性有り』と宣説すべし」等云々。

いかようなることのあるゆえに、身命をすつるまでにて

あるやらん。委細にうけたまわり候わん。

こた　い　よ　しよしん　とき　ぞんねん　でんぎよう　こうぼう　じ
答えて云わく、予が初心の時の存念は「伝教・弘法・慈

かく　ちしやうとう　ちよくせん　たま　かんど　渡　われ
覚・智証等の勅宣を給わつて漢土にわたりしことの『我は

しんみよう　あい　当　げんじやうさんぞう　かんど　がつし
身命を愛せず』にあたれるか。玄奘三蔵の漢土より月氏に

い　ろくしやう　あいだしんみよう　滅　とう　せつせん
入りしに、六生が間身命をほろぼしし、これ等か。雪山

どうじ　はんげ　み　投　やくおうぼさつ　しちまんにせんさい　あいだ
童子の半偈のために身をなげ、薬王菩薩の七万二千歳が間

ひじ　焼　思　きやうもん
臂をやきしことか」なんどおもいしほどに、経文のごとき

んば、これらにはあらず。

きようもん

われ しんみよう あい

もう

かみ さんるい てきじん

經文に「我は身命を愛せず」と申すは、上に三類の敵人

挙

かれ

罵

責

とうじよう

およ

しんみよう

奪

をあげて、彼らがのりせめ刀杖に及んで身命をうばうと

見

ねはんぎよう

もん

しんみよう

うしな

もとみえたり。また涅槃經の文に「むしろ身命を喪うと

とう

説

そうろう

つぎしも

きようもん

い

いつせんだいあ

も」等ととかれて候は、次下の經文に云わく「二闡提有

らん

かたち

な

くうしよ

じゅう

ほうどうきようてん

ひぼう

つて、羅漢の像を作して空処に住し、方等經典を誹謗す。

もろもろ

ぼんぷにんみお

みな

しん

あらかん

諸の凡夫人見已わつて、皆『真の阿羅漢にして、これ

だいぼさつ

い

とううんぬん

か

ほけきよう

もん

だいさん

大菩薩なり』と謂わん」等云々。彼の法華經の文に第三の

てきじん

と

い

あれんにや

のうえ

くうげん

敵人を説いて云わく「あるいは阿練若に納衣にして空閑に

あ ないしよ くぎよう

ろくつう らかん

在って乃至世の恭敬するところとなること、六通の羅漢の

あ

とううんぬん

はつないおんぎよう

い

らかん

に

ごときもの有らん」等云々。般泥洹經に云わく「羅漢に似

いっせんたい

あくごう

ぎよう

あ

とううんぬん

たる一闡提にして惡業を行ずるもの有らん」等云々。これ

きようもん

しようほう

ごうてき

もう

あくおう

あくしん

らの經文は、正法の強敵と申すは、惡王・惡臣よりも、

げどう まおう

はかい

そうりよ

じかい

うち

だいそう

外道・魔王よりも、破戒の僧侶よりも、持戒・有智の大僧の

なか だいほうぼう ひと

みようらくだいし 書

い

中に大謗法の人あるべし。されば、妙樂大師かいて云わく

だいさん

もつと

はなは

のちのち

もの

うた

し

がた

「第三は最も甚だし。後々の者は転た識り難きをもつて

ゆえ

とううんぬん

の故に」等云々。

ほけきよう

だいご

まき

い

ほけきよう

しよぶつによらい

法華經の第五の卷に云わく「この法華經は、諸仏如来の

ひみつ ぞう しよきよう なか もつと かみ あ とう

秘密の蔵にして、諸経の中において最もその上に在り」等

うんぬん きようもん さいざい ごじよう もつと かみ あ し

云々。この経文に「最在其上（最もその上に在り）」の四

じ きようもん ほけきよう いっさいきよう

字あり。されば、この経文のごときんば、法華経を一切経

いただき もう ほけきよう ぎようじや

の頂にありと申すが、法華経の行者にてはあるべきか。

こくおう そんちよう ひとびと 数 多

しかるをまた、国王に尊重せらるる人々あまたありて

ほけきよう 勝 きようぎよう もう ひと

「法華経にまさりておわする経々まします」と申す人に

責 合 そうら とき ひと おうしんとうご きえ ほけきよう

せめあい候わん時、かの人は王臣等御帰依あり、法華経の

ぎようじや ひんどうら くに 卑 そうら

行者は貧道なるゆえに国こぞつてこれをいやしみ候わん

とき ふきようぼさつ けんあいろんじ もう 強

時、不軽菩薩のごとく賢愛論師のごとく申しつおらば、

しんみよう およ

だいいち だいい

そうろう

身命に及ぶべし。これが第一の大事なるべしとみえて候。

いま にちれん み 当 よ ぶんざい

このことは今の日蓮が身にあたれり。予が分齊として、

こうぼうだいし じかくだいし ぜんむいさんぞう こんごうちさんぞう ふくうさんぞう

弘法大師・慈覚大師・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵な

ほけきよう ごうてき きようもん 実

むけんじごく

んどを「法華経の強敵なり。经文まことならば無間地獄は

うたが もう らぎよう たいか い 易

疑いなし」なんと申すは、裸形にして大火に入るはやすし、

しゅみせん て 投 たいせき お たいかい

須弥山を手にとってなげんはやすし、大石を負って大海を

渡 にほんこく ほうもん た だいい

わたらんはやすし、日本国にしてこの法門を立てんは大事

うんぬん

なるべし云々。

りようぜんじようど きようしゅしやくそん ほうじようせかい たほうぶつ じつぼうふんじん

靈山浄土の教主釈尊、宝浄世界の多宝仏、十方分身の

しよぶつ

じゆせんがい

ぼさつとう

ぼんしゃく

にちがつ

してんとう

みよう

加

諸仏、地涌千界の菩薩等、梵釈・日月・四天等、冥にかし

けん

たす

たま

いちじいちにち

あんのん

頭^{けん}に助け給^{たす}わ^{たま}ずば、一時一日も安穩なるべしや。